

熊谷市東浦遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

東 浦 遺 跡

2 0 0 6

埼玉県熊谷市東浦遺跡調査会

熊谷市東浦遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

ひがし う ら い せ き
東 浦 遺 跡

2 0 0 6

埼玉県熊谷市東浦遺跡調査会

序

私たちの郷土熊谷には、祖先が営々と築いてきた貴重な文化財が多数あります。なかでも原始・古代の集落跡や中世の館跡等の埋蔵文化財が、熊谷市内に多く分布しています。

こうした文化財は、地域の歴史・文化を伝えるばかりでなく、熊谷市の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

さて、今回の発掘調査を実施した東浦遺跡は、熊谷市小曾根に所在いたします。同地の東側一帯は、中条遺跡群地内であり、熊谷スポーツ文化公園建設に先立ち継続的に調査が実施され、大規模な古代集落や古墳等の貴重な成果を得ております。今回の調査は、こうした古代遺跡密集地の西端にあたり、老人介護ホーム建設に先立ち、急遽発掘調査を実施したものであります。

本書は、調査で確認された集落跡の成果をまとめたものでございますが、文化財の記録の保存のみならず、郷土の歴史解明、学術研究の資料、あるいは学校教育や社会教育の参考資料として広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたりまして、文化財保護法の趣旨を尊重され、格別のご理解とご協力を賜りました事業主体者並びに地元関係者には厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

熊谷市東浦遺跡調査会
会 長 野 原 晃

例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市小曾根字東浦337－1他に所在する、東浦遺跡（埼玉県遺跡番号№59－111）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、老人介護ホーム建設に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市東浦遺跡調査会が実施した。
- 3 本事業の組織は、I章のとおりである。
- 4 発掘調査期間は平成17年4月19日～平成17年6月3日である。
整理、報告書作成期間は平成17年9月1日～平成18年3月31日である。
- 5 発掘調査及び整理・報告書作成は、熊谷市教育委員会寺社下博が担当した。
- 6 発掘調査及び遺物の写真撮影は、寺社下が行った。
- 7 本書の執筆・編集は、寺社下が行った。
- 8 出土遺物は、熊谷市教育委員会で保管している。
- 9 発掘調査及び整理作業の参加者は、以下のとおりである（敬称略、五十音順）。
今田真理、上武美代、川口志津子、佐藤春江、新木幸子、鈴木千豆子、西川祥子、野辺君江、
平野弘美、堀越 守、牧野常子、増田キヨ子、村山 近、龍前幸子
- 10 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。
（敬称略、五十音順）
大里郡市文化財担当者会、埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課、菅谷浩之

凡 例

- 1 本文及び挿図中で使用した遺構の表記記号は、次のとおりである。

SB……掘立柱建物跡、SD……溝跡、SJ……住居跡、SK……土坑、ST……竪穴状遺構、
SX……不明遺構、P……ピット

なお、各遺構の名称及び番号は、整理作業の段階で変更したものもある。

- 2 遺構挿図中のスクリーントーンは、次のとおりである。

 = 地 山  = 焼 土（断面図中は黒塗り）  = 灰（炭化物）

- 3 遺構挿図・土層断面図中の表記記号は、次のとおりである。

S……川原石、P……土器

- 4 遺構挿図の縮尺は、次のとおりである。

周辺遺跡分布図……1/50,000、遺跡位置図……1/2,500、遺構全測図……1/200、
基本土層図……1/40、住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・土坑平面図及び土層断面図……1/60、
溝跡平面図及び土層断面図……1/120、住居跡カマド平面図及び土層断面図……1/30

- 5 遺構平面図・土層断面図中の遺物番号は、各遺物実測図中の番号に一致する。

- 6 遺構土層断面図及びエレベーション図のレベル基準線は、全体で標高を統一することが不可能であったため、同一図版で統一できた場合にはスケール上位にのみ数値を示したが、それもできなかった場合には、その都度、それぞれの基準線上に数値を示した。

- 7 遺物実測図の縮尺は、土師器・須恵器・陶磁器・瓦器・土錘・砥石を除く石製品は1/4、特殊須恵器・砥石・石錘・鉄鏃は1/2とした。

- 8 遺物実測図の中で径が実測できなかった遺物については、中心線の上端もしくは下端部分を空白とした。また、断面表現は、還元焰焼成の須恵器を黒塗りとし、他は白抜きとした。（スクリーントーンは、彩色を示す）

- 9 遺物観察表の凡例は、次のとおりである。

・番号欄に網目の付された遺物は、写真図版に掲載された遺物であることを示す。

・法量の単位は、cm、gである。また、推定値は括弧付けで示した。

・胎土は、土器に含まれる鉱物を以下の記号によって、含有率の多い順に示した。

A……白色粒子、B……黒色粒子、C……赤色粒子、D……褐色粒子、E……赤褐色粒子、
F……白色針状物質、G……長石、H……石英、i……白雲母、J……黒雲母、K……角閃石、
L……片岩、M……砂粒、N……礫、O……金雲母

・色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修1997年版）に照らし、最も近似した色相を示した。

・焼成は次のように区別した。

A……良好、B……普通、C……不良

目 次

序

例 言

凡 例

目 次

I	発掘調査の概要	1
1	調査に至る経過	1
2	発掘調査、整理・報告書作成の経過	1
3	発掘調査、整理・報告書刊行の組織	2
II	遺跡の立地と環境	3
III	遺跡の概要	13
1	調査の方法と成果	13
2	基本土層	13
IV	遺構と遺物	14
1	住居跡	14
2	掘立柱建物跡	36
3	竪穴状遺構	39
4	土坑	40
5	溝跡	44
6	その他	45
V	まとめ	46

挿図目次

第1図	埼玉県の地形……………	3	第20図	第4号住居跡出土遺物②……………	30
第2図	周辺遺跡分布図……………	6	第21図	第4号住居跡出土遺物③……………	31
第3図	東浦遺跡調査区位置図……………	11	第22図	第5号住居跡……………	32
第4図	東浦遺跡調査区全測図……………	12	第23図	第5号住居跡カマド……………	33
第5図	東浦遺跡基本土層図……………	12	第24図	第5号・第6号・第7号 住居跡出土遺物……………	33
第6図	第1号住居跡……………	14	第25図	第6号住居跡……………	34
第7図	第1号住居跡出土遺物……………	15	第26図	第6号住居跡カマド……………	34
第8図	第2号住居跡……………	16	第27図	第7号住居跡……………	35
第9図	第2号住居跡カマド……………	17	第28図	第7号住居跡カマド……………	36
第10図	第2号住居跡遺物出土状況……………	18	第29図	第1号掘立柱建物跡……………	37
第11図	第2号住居跡出土遺物①……………	19	第30図	第1号掘立柱建物跡加工石……………	38
第12図	第2号住居跡出土遺物②……………	20	第31図	第1号竪穴状遺構・出土遺物、 第9号土坑……………	39
第13図	第3号住居跡……………	22	第32図	第1号～8号、10号土坑……………	41
第14図	第3号住居跡カマド……………	23	第33図	土坑出土遺物①……………	42
第15図	第3号住居跡出土遺物①……………	24	第34図	土坑出土遺物②……………	43
第16図	第3号住居跡出土遺物②……………	25	第35図	第1号・第2号溝跡……………	44
第17図	第4号住居跡……………	27	第36図	第1号・第2号不明遺構出土遺物……………	45
第18図	第4号住居跡カマド……………	28			
第19図	第4号住居跡出土遺物①……………	29			

表目次

第1表	第1号住居跡出土遺物観察表……………	15・16	第6表	第6号住居跡出土遺物観察表……………	33
第2表	第2号住居跡出土遺物観察表……………	21	第7表	第7号住居跡出土遺物観察表……………	33
第3表	第3号住居跡出土遺物観察表……………	25・26	第8表	第1号竪穴状遺構出土遺物観察表……………	39
第4表	第4号住居跡出土遺物観察表 ……………	28・30・31	第9表	土坑出土遺物観察表……………	42
第5表	第5号住居跡出土遺物観察表……………	32	第10表	不明遺構出土遺物観察表……………	45

図版目次

図版 1	遺跡全景（北東より） 遺跡全景（南西より）	図版11	第 3 号土坑 第 4 号・第 5 号土坑 第 6 号土坑検出状況
図版 2	調査区全景（北より） 調査区全景（南より）	図版12	第 6 号土坑板碑検出状況 第 6 号土坑 第 7 号土坑
図版 3	第 1 号住居跡全景 第 1 号住居跡遺物出土状況① 第 1 号住居跡遺物出土状況②	図版13	第 8 号土坑 第 9 号土坑 第10号土坑
図版 4	第 2 号住居跡検出状況 第 2 号住居跡全景 第 2 号住居跡カマド	図版14	第 1 号・第 2 号住居跡出土遺物 1－1、2、3 2－1、2、3、4、8
図版 5	第 2 号住居跡遺物出土状況①・竪穴北 部 第 2 号住居跡遺物出土状況②・カマド 周辺 第 2 号住居跡遺物出土状況③・竪穴南 部	図版15	第 2 号住居跡出土遺物 9、10、11、12、13
図版 6	第 3 号住居跡全景 第 3 号住居跡カマド 第 3 号住居跡遺物出土状況・竪穴東部	図版16	第 2 号住居跡出土遺物 14、15、16、17、18
図版 7	第 4 号住居跡全景 第 4 号住居跡カマド 第 4 号住居跡遺物出土状況①・カマド 周辺	図版17	第 2 号住居跡出土遺物 19、20、21
図版 8	第 4 号住居跡遺物出土状況②・覆土中 第 5 号住居跡全景 第 6 号住居跡全景	図版18	第 2 号・第 3 号住居跡出土遺物 2－22、23、24 3－3、5、7、8
図版 9	第 7 号住居跡全景 第 1 号掘立柱建物跡全景 第 1 号竪穴跡全景	図版19	第 3 号住居跡出土遺物 10、12、14、16、17
図版10	第 1 号・第 2 号溝跡全景 第 1 号土坑 第 2 号土坑	図版20	第 4 号住居跡出土遺物 4、5、7、9、17、20
		図版21	第 4 号・第 6 号住居跡出土遺物 4－13、28、32、33、34 6－2、各住居跡出土土錘
		図版22	その他の遺物 S T 1－1、S X 1－3、S K 6－1 S K10－1、S B 1－1、S X 2－5

I 発掘調査の概要

1. 調査に至る経緯

平成17年1月24日、医療法人社団松弘会理事長済陽輝久氏より、熊谷市小曾根字東浦337-1他5,730㎡に及ぶ介護老人保健施設の建設に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出された。

対象地は、中条古墳群・金堀塚古墳（熊谷市№59-010-20）が所在しているため、熊谷市教育委員会では、古墳の規模等の確認及び周辺地の遺構・遺物の所在確認のため、試掘調査の必要がある旨説明し、調査実施で合意を得た。

これに基づき同年2月16日に試掘調査を実施した結果、古墳以外に、古墳時代から平安時代に及ぶ集落跡が発見され、新たに東浦遺跡として登録されるに至った（熊谷市№59-111）。

市教育委員会では、この旨事業主に回答するとともに、当該地の保存に関する協議を重ねた。

工事計画では、建物建設予定地が金堀塚古墳の所在地ははずされていたものの、東浦遺跡部分は対象となるため、工事計画の変更を中心とした協議が重ねられたが、協議の結果、工事計画の変更が困難であるため、対象地については発掘調査を実施することとなったものである。

その後、事業主と具体的な協議を重ね、工事開始期日との兼ね合いから、発掘調査は4月中旬に開始することとなり、市教育委員会では早急に発掘調査を実施するため、平成17年4月17日に熊谷市東浦遺跡調査会を設立し、4月19日より発掘調査を実施することとなった。

法定手続きについては、事業主からは文化財保護法第57条の2第1項に基づく発掘調査の届出が平成17年1月24日付けで埼玉県教育委員会教育長へ提出された。これに対し同年6月24日付け教生文第3-174号で発掘調査の実施についての指示通知があった。熊谷市東浦遺跡調査会会長による文化財保護法第92条第1項に基づく発掘調査の届出が平成17年6月6日付けで埼玉県教育委員会教育長へ提出された。これに対し同年6月24日付け教生文第2-26号で発掘調査の実施についての指示通知があった。

発掘調査は、平成17年4月19日より開始された。

2. 発掘調査、整理・報告書作成の経過

発掘調査は、介護老人保健施設の建設部分が試掘調査によって確認された東浦遺跡と重複する部分を対象に実施した。調査期間は、平成17年4月19日から同年6月3日までで、調査面積は270㎡である。

発掘調査は、はじめ重機により表土及び上位層を掘削した。掘削終了後には発掘調査作業員を導入し、遺構プラン確認を目的とした精査を実施した。確認された遺構は、上位のものから掘り下げ、実測・写真撮影・遺物取り上げを順次行っていった。また遺構プランが不明瞭な場合には、小トレンチを配し、断面からの観察を加えた。そして6月3日には調査区全景の写真撮影を終了し、器財等の撤収を行って現場における作業を終了した。

整理・報告書作成作業は、平成17年9月1日より開始し、遺物の洗浄・注記・復元実測作業、遺構の図面整理、遺構・遺物図面のトレース作業・図版組み、遺物写真撮影、遺構・遺物写真の図版組みを行い、翌年1月に原稿執筆、割付を実施した。その後、1月末には印刷業者を決定し、2～3月の校正を経て本書の印刷を完了し、報告書を刊行した。

3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主 体 者	熊谷市東浦遺跡調査会
会 長	飯塚誠一郎（熊谷市教育委員会教育長、平成17年12月22日まで） 野 原 晃（熊谷市教育委員会教育長、平成17年12月23日より）
理 事	新 井 晴 次（熊谷市文化財保護審議会会長） 増 田 和 巳（熊谷市教育委員会教育次長）
監 事	菅 谷 浩 之（熊谷市文化財保護審議会委員） 柴 崎 久（熊谷市教育委員会教育総務課長）
事 務 局 長	長 島 泰 久（熊谷市教育委員会社会教育課長）
事務局次長	岩 本 克 昌（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護担当副参事）
事 務 局 員	金 子 正 之（熊谷市教育委員会社会教育課主幹兼文化財保護係長） 寺社下 博（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主査）

II 遺跡の立地と環境

遺跡の立地 東浦遺跡は、熊谷市小曾根字東浦337番地1他に所在する。荒川と利根川の最も近接する（第1図）地域にあって、荒川の北約5.5km、利根川の南約5.2kmに位置する。またJR高崎線熊谷駅からは、北約5.0kmに当たる。

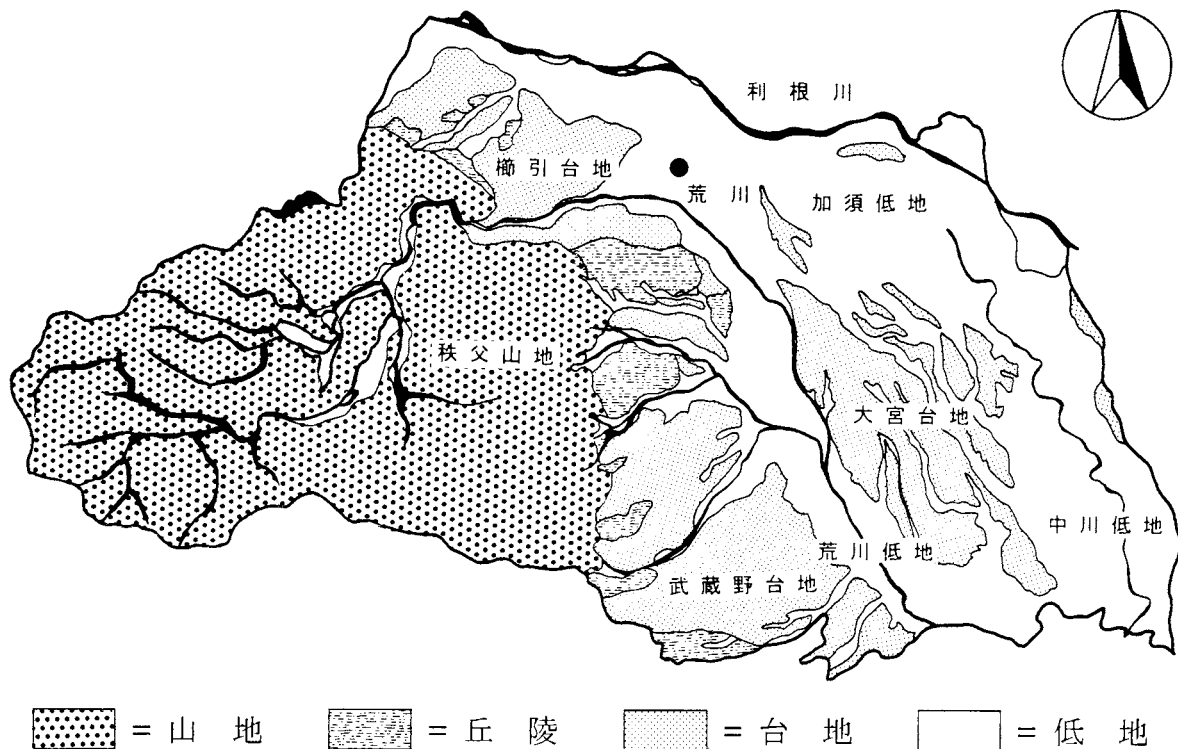
熊谷市域は、利根川と荒川両河川を跨ぎ、西部が櫛引台地上、荒川以南が江南台地上に位置するほか、大半は新荒川扇状地（熊谷扇状地）及び、市域の北部から北東縁にかけては、利根川によって形成された妻沼低地がひろがっている。

本遺跡の所在する小曾根地区は、南北に広がる熊谷市のほぼ中央部に当たり、荒川の旧流路とそれに沿って形成された自然堤防が主体を成すが、小曾根地区を含む周囲の低地帯は、熊谷扇状地末端地と妻沼低地末端地が錯綜する地に当たり、複雑に入り組んだ湧水地、旧河道、自然堤防によって形成されている。

このような地域であるため、低地帯では、両河川の氾濫等によって砂・シルト・粘土層が幾重にも厚く堆積し、遺跡の発見を遅らせる原因ともなっている。

しかしこうした土壌であるため、現況では大規模に整理された麦畑あるいは水田として大いに利用されている所でもある。標高は、27.0m前後である。

こうした土地の性格上、本地域にはまだまだ未発見の遺跡が多数存在する可能性が高い。



第1図 埼玉県の地形

歴史的環境 本遺跡を中心とした熊谷扇状地末端付近の荒川の古流路地域及び、櫛挽台地北端と妻沼（第2図）低地南端の接する地域では、低地上に弥生時代中期の初期稲作が展開されるのであるが、特に櫛挽台地北端と妻沼低地南端の接する地域では、先行する縄文時代の遺跡も散見されさらに、時代が遡る様相を呈している。現在までの段階で最古の遺物と考えられるのは、この櫛挽台地上東端の籠原裏遺跡（未掲載）から発見された黒曜石製尖頭器（旧石器時代）である。そして縄文時代に入っては、櫛挽台地上北端の深谷市東方城跡（未掲載）から検出された尖頭器が、草創期に該当すると考えられている。しかし、いずれも覆土中からの出土であり、詳細は不明である。

縄文時代 縄文時代前期に入ると、やはり櫛挽台地上に集落跡が確認されてくる。櫛挽台地北東先端部に位置する寺東遺跡（18）では、前期（関山式）土器が検出されている。櫛挽台地は、寺東遺跡の所在する北東端部では北もしくは東に向けて緩斜面を成して低地へ移行するが、現荒川に近接する南部三ヶ尻地区では、東に広がる熊谷扇状地との間に断崖を成している。この三ヶ尻地区の林遺跡（未掲載）で前期（黒浜式）の集落跡、さらに台地奥部の小台遺跡（未掲載）でも前期（黒浜式・諸磯b式）の土器等（周辺で早期の遺物）が検出され、前期（早期）の遺跡は、全て櫛挽台地上に位置するという様相を呈しているといえる。

中期には、さらに遺跡数が増加する。櫛挽台地上には、前期から継続する遺跡及びその周辺部、さらに後葉にかけては、寺東遺跡（18）が所在している。

一方、寺東遺跡の北・妻沼低地上には、深谷市域福川の自然堤防上に数遺跡が、また別府沼（利根川旧河川）の緩斜面上には石田遺跡（17）・入川遺跡（13）や深町遺跡（14）など、中期（加曾利E式）から後期（堀之内式）に及ぶ集落跡が確認されている。

こうした低地帯の中期の遺跡は、そのほとんどが後期に継続する特色をもっている。

後期に開始される遺跡には、深谷市域の福川自然堤防上に、新屋敷東遺跡（未掲載・晩期に継続）等が、別府沼の緩斜面上には、先に見た石田遺跡の対岸に後期（加曾利B式）の土器群が検出された横間栗遺跡（15）が所在しているのを始め、一本木前遺跡（20）でも土器群が検出されている。

一方、熊谷市東部地域での縄文時代の遺跡は、肥塚古墳群内（L）、諏訪木遺跡（51・加曾利B式）や北島遺跡（34）、池上遺跡（52）などで、いずれも後期（北島遺跡では晩期まで継続しており、前中西遺跡（50）では晩期の土器群が検出されている。）の土器や石器が検出されており、西部地域同様、低地帯旧河川の緩斜面上での集落形成が展開されてきた状況がうかがえる。

弥生時代 縄文時代後期の集落跡が検出された横間栗遺跡（15）は、弥生時代中期（須和田式期）の再埋葬16基が検出されていることでも知られている。

横間栗遺跡は、先にみたとおり別府沼左岸の自然堤防上に立地しているが、こうした弥生時代中期中葉の再埋葬は、熊谷市三ヶ尻遺跡内の上古遺跡（未掲載）が櫛挽台地上に位置する他は、熊谷市飯塚北遺跡（1）、飯塚遺跡（3）、飯塚南遺跡（4）等、いずれも横間栗遺跡の北側一帯に展開される妻沼低地上に集中的に所在しているのである。

また、当該期の集落遺跡は、再葬墓より若干時期が下がるが、やはり妻沼低地上に、関下遺跡（16）、一本木前遺跡（20）、飯塚遺跡（3）、飯塚南遺跡（4）等が知られている。また櫛挽台地上の別府氏館跡、寺東遺跡（18）でも当該期の土器が検出されている。このうち福川上流域に位置する深谷市上敷免遺跡では、前期（遠賀川式）の土器も検出されており、集落の開始が遡る可能性がある。

一方、熊谷市東部地域から行田市に及ぶ熊谷扇状地の末端（標高約26m前後）にも、弥生時代中期のいまひとつの集中がみられる。

北島遺跡（34）では、中期後半の再葬墓や土坑墓が検出されている。また、近在する前中西遺跡（50）では、北島遺跡に後続する中期後半～後期初頭の再葬墓と方形周溝墓さらには木棺墓という、異なる三つの葬送形態が同居しており、異彩を放っている。さらに、前中西遺跡や北島遺跡の東に位置する行田市の小敷田遺跡（53）では、これら両遺跡に先行する、関東地方で最古段階の須和田式期の方形周溝墓5基が検出されている。またこれら三遺跡に囲まれた星川・忍川流域に立地する、翡翠の勾玉が出土した古宮遺跡（43）、多量の磨製石鏃が出土した諏訪木遺跡（51）、水田と隣接する環濠集落の池上遺跡・池上西、平戸遺跡（54）でも当該期の土器群が検出され、大規模な集落が展開されているのである。

このうち北島遺跡では、掘立柱建物跡や土坑と共に70軒を超える住居跡を中心に、堰・水路や5～8mの方形区画をもつ水田跡も検出されている。時期は、開始が前期末（土坑）とされ、中期から後期に及ぶ。装着されたままの打製石斧、大型蛤刃石斧、扁平片刃磨製石斧、磨製石鏃、弓・容器等の木製品等、大量の遺物が出土している。すでにこの時期に、扇状地末端の湧水地を背景として低地を利用した、大規模で積極的な水田経営が行われていたことを明白に物語っている、といえよう。

このように、妻沼低地に集中する遺跡群と、熊谷扇状地末端に集中する2つの遺跡群にあって、立地状況及びその開始が前期に遡る可能性をもつという共通性をもつものの、墓制においては、再葬墓と方形周溝墓の両者を併せもつ前中西遺跡を境にして、熊谷市の東部と西部で、まったく異なる制度が展開されていた様子が伺えるのである。

弥生時代中期の立地状況は、後期に至っても踏襲され、依然として妻沼低地上と熊谷扇状地末端部の2地点に集中するが、それぞれの地域が拡大する様相が加わってくる。

東部の北島遺跡周辺では、北島遺跡（34）、中条条里遺跡内（37）の東沢遺跡、行田市池守遺跡（未掲載）等、大規模な集落遺跡が展開されてくる様相を呈してくる。ほとんどで吉ヶ谷式土器が出土している。また、北島遺跡の西に接した天神遺跡（33）では、小規模な集落が確認されている。

先の妻沼低地上には、熊谷市弥藤吾新田遺跡（6）等が所在し、弥生町式土器が検出されている。

古墳時代

古墳時代前期に入ると、立地状況は前代を踏襲するものの、遺跡数は増大し、さらには各遺跡それぞれの規模も拡大してくる。

熊谷市東部から行田市域の熊谷扇状地末端から妻沼低地の錯綜地帯では、池上遺跡（52）、池守遺跡（未掲載）、小敷田遺跡（53）、皿尾遺跡（未掲載）、東沢遺跡（37）、天神遺跡（33）、



第2図所載遺跡

1 飯塚北遺跡 2 妻沼小学校内遺跡 3 飯塚遺跡 4 飯塚南遺跡 5 道ヶ谷戸遺跡
 6 弥藤吾新田遺跡 7 西城切通遺跡 8 鶯森遺跡 9 鶯森入胎遺跡 10 長安寺北遺跡
 11 長安寺遺跡 12 光屋敷遺跡 13 入川遺跡 14 深町遺跡 15 横間栗遺跡 16 関下遺跡
 17 石田遺跡 18 寺東遺跡 19 別府条里遺跡 20 一本木前遺跡 21 中耕地遺跡 22
 西通遺跡 23 東通遺跡 24 奈良東耕地遺跡 25 天神下遺跡 26 土用ヶ谷戸遺跡 27 稻
 荷東遺跡 28 新ヶ谷戸遺跡 29 稻荷木遺跡 30 在家前遺跡 31 中条遺跡 32 中島遺跡
 33 天神遺跡 34 北島遺跡 35 田谷遺跡 36 天神東遺跡 37 中条条里東沢遺跡 38 肥
 塚中島遺跡 39 出口下遺跡 40 出口上遺跡 41 八幡上遺跡 42 上河原遺跡 43 古宮遺跡
 44 東遺跡 45 高根遺跡 46 不二ノ腰遺跡 47 兵部裏屋敷遺跡 48 田角遺跡 49 藤乃
 宮遺跡 50 前中西遺跡 51 諏訪木遺跡 52 池上遺跡 53 小敷田遺跡 54 平戸遺跡 55
 持田藤の宮遺跡 56 万吉西浦遺跡 57 村岡遺跡 ※東浦遺跡

A 摩多利神社古墳 B 飯塚北古墳群 C 妻沼No.6古墳 D 上江袋古墳群 E 妻沼No.12
 古墳 F 王子古墳 G 横塚山古墳 H 別府古墳群 I 在家古墳群 J 玉井古墳群 K
 中条古墳群 L 肥塚古墳群 M 広瀬古墳群 N 坪井古墳群 O 石原古墳群 P 上之古
 墳群 Q 村岡古墳群

北島遺跡(34)、天神東遺跡(36)、中条遺跡内の雷電塚遺跡(31)等、多数の集落遺跡が知られている。このうち小敷田遺跡では、畿内や東海地方系の土器が出土し、雷電塚遺跡からは脚部穿孔高杯・器台・S字口縁台付甕と共に剣型をはじめとした多数の滑石製模造品が出土している。また小敷田遺跡、東沢遺跡、北島遺跡からは鋤・鍬等多数の木製農具が出土している。

さらに小敷田遺跡では18基、東沢遺跡でも数基の方形周溝墓が確認され、両周溝墓群の溝内からは木製の鋤等、多数の木器類が検出されている。

一方、熊谷市西部から深谷市にかけての妻沼低地上では、深谷市域の戸森松原遺跡、上敷免遺跡、本郷前東遺跡、明戸東遺跡、宮ヶ谷戸遺跡、前遺跡、戸森前遺跡、東川端遺跡、清水上遺跡(以上未掲載)、熊谷市域の弥藤吾新田遺跡(6)、鶯ノ森入胎遺跡(9)、根絡遺跡(未掲載)、横間栗遺跡(15)、一本木前遺跡(20)、中耕地遺跡(21)等で集落が営まれている。このうち一本木前遺跡、弥藤吾新田遺跡は、大規模な集落が想定されており、清水上遺跡では畠跡も検出されている。

さらに、上敷免遺跡では9基、東川端遺跡では6基、一本木前遺跡(20)では4基の方形周溝墓群が検出されており、いずれも墓域を形成している。このうち東川端遺跡第2号方形周溝墓からはパレススタイルの大型壺が、一本木前遺跡2号方形周溝墓からは器台・埴等の土器群と共に、方台部中央に検出された主体部からは翡翠製勾玉・碧玉製管玉等が出土している。

このように、弥生時代中期(一部では前期の可能性)に開始された低地帯での稲作農耕は、同地で継承され、規模等が発展・拡大し、定着してきた様相を呈しているのである。

中期の様相は今ひとつ明確ではないが、各遺跡の規模は小さいものの、当該期の遺物が

出土する遺跡数は多い。

東部の中条遺跡内の権現山遺跡（31）では把手付大型甕を伴った出現期の竈を備えた住居跡が検出され、北島遺跡では須恵器瓦を模倣した土師器小型壺が出土している。さらに最近の調査では、藤之宮遺跡（49）でも一括の土器群が検出されている。いずれも中期後半以降の所産であり、東部地区では、今後の調査への期待が大きい。

一方、西部の妻沼低地上では、深谷市の砂田遺跡等数遺跡、熊谷市の一本木前遺跡（20）等で1軒～9軒の住居跡が検出されている。このうち深谷市域の東川端遺跡では、剣型の滑石製模造品を用いた集落内祭祀が確認されている。

また、妻沼町の飯塚北古墳群（B）では、後期に移行する5世紀後半の時期所産の、方形周溝墓と円形周溝墓の共存した状況がみられる。方形周溝墓3基、円形周溝墓（全て円墳として捉えられている）16基が検出されており、方形から円形への変化と捉えている。本古墳群は、7世紀代まで継続する。

明確な古墳の出現は、中期の後半、B種横刷毛をもつ朝顔型円筒埴輪をもつ前方後円墳・横塚山古墳（G）をもってその嚆矢とする。

西部地区では、妻沼低地上に立地する、この横塚山古墳を初源として、その周辺部で埴輪盛期の古墳が群在している。現在までのところ、妻沼低地上最西端に立地する古墳群は深谷市域の上増田古墳群（未掲載）であり、直径20m以下の円墳12基が確認されている。北方には、先にみた、方形周溝墓から始まり、6世紀初頭から7世紀まで継続する円墳群で構成される妻沼町飯塚北古墳群（B）や摩多利神社古墳（A）が位置している。さらに福川に沿って妻沼No.6古墳（C）、上江袋古墳群（D）、妻沼No.12古墳（E）、王子古墳（F）、鵜ノ森入胎遺跡（19）内古墳、が点在（全て円墳）している。

横塚山古墳群の南に位置し、熊谷低地上に立地する玉井古墳群（J）は、17基の円墳と、2基の方墳で構成されている。このうち調査された新ヶ谷戸1号墳は、円墳で川原石積み of 胴張り型の横穴式石室をもち、土師器・須恵器・直刀・鉄鏃等が出土している。

熊谷低地を南下すると、薬師堂古墳（円墳・控積の横穴式石室、銅釧・耳環・直刀・鉄鏃・埴輪）を中心とする坪井古墳群（N）、埴輪をもつ8基の円墳からなる石原古墳群（O）と続く。

また、櫛挽台地縁辺部にも古墳群が形成されている。東南端に位置している三ヶ尻古墳群（未掲載）は、2基の前方後円墳と58基の円墳で構成されている。埴輪をもつ場合ともたない場合があるが、石室は河原石使用の横穴式石室である。台地北東端では、前方後円墳1基、円墳16基で構成される別府古墳群（H）がある。このうち円墳・仲廊古墳が調査され、円筒埴輪列が検出されている。またヤス塚古墳では、農夫の埴輪が出土しているなど、形象を含む埴輪盛期の古墳が継続して造営されている。

一方、東部地区・熊谷低地で出現した中条古墳群内（K）の鎧塚古墳は、盾型の周溝をもち、前方部を西に向けた帆立貝式全前方後円墳で、全長43.8mを測る。須恵器高杯型器台を中心に土師器高杯・坏・甕をセットとした墓前祭祀土器群が2ヶ所検出されている。女塚1号墳は、二重周溝をもつが、やはり前方部を西に向けた帆立貝式前方後円墳で、全

長46.0mを測る。前方部及び周溝外堤から盾持武人埴輪、太鼓を抱える人物埴輪等、多数の形象埴輪の出土が特徴的である。両古墳共5世紀末頃の築造と考えられている。また両古墳は、東西約200mの距離に位置し、周囲に円墳が群在する。そのうち2号墳では馬・鹿・猪等の動物や人物等の形象埴輪が出土し、4号墳では川原石使用の礫礫が検出されている。これらを含む中条古墳群（K）では、国重要文化財の馬型・武人埴輪を出土した鹿那祇東古墳、最近の調査で検出された北島遺跡（34）内の古墳群等の、埴輪最盛期の古墳から、直径38m、周溝をもち中央に長方形の礫敷のみられた権現山古墳や、側壁に切組積の角閃石安山岩、天井・奥壁に緑泥片岩を用いた大型の横穴式石室をもつ大型円墳・大塚古墳まで、5世紀の末頃から7世紀前半までの古墳が造営され続ける。

こうした状況は、中条古墳群の南に位置する、現存する東光寺古墳を中心とした上之古墳群（P）、16基の円墳が確認された肥塚古墳群（L）でも同様（開始時期は6世紀）である。このうち、肥塚古墳群では川原石乱石積と角閃石安山岩切組積2種類の胴張型横穴式石室が確認されており、後者は利根川系、前者は荒川系の石材であり、中条古墳群内の大塚古墳同様、両河川の相克によって作り出された当地の地形的特長と一致し、非常に興味深い様相を呈しているのである。

このような、埴輪をもつ古墳からもたない古墳へと継続して築造され続けた古墳群とは異なり、埴輪消滅後に築造が開始された古墳群も現れる。広瀬古墳群（M）、籠原裏古墳群（未掲載）、在家古墳群（I）が、それである。

熊谷扇状地の要付近に築造された広瀬古墳群（M）は、上円下方墳である宮塚古墳、蕨手刀を出土した熊谷商業高校内古墳などで構成されている。宮塚古墳は、現況では上円下方の形態を示すが、一部露出した墳丘裾部から、多角形墳の可能性も考えられている。

櫛挽台地東縁部に築かれていた三ヶ尻古墳群と別府古墳群（H）の中間台地上には、埴輪をもたず、川原石乱石積の胴張型横穴式石室を有する古墳群が南北に分離して築造されてくる。南側には、一部の古墳に八角形や六角形の終末期古墳を含む籠原裏古墳群（未掲載）が築かれる。10基から成り、いずれも7世紀の後半から末の築造と考えられる。また北側には、やや先行する7世紀台の6基が確認された在家古墳群（i）が築かれている。

これら三古墳群は、南から広瀬古墳群（M）、籠原裏古墳群、在家古墳群（i）と、ほぼ南北の直線状に位置し、その延長線上には、8世紀初頭の創建と考えられる西別府廃寺（未掲載）、7世紀中ごろから11世紀まで継続された、石製模造品・土錘・墨書土器を用いた水源祭祀跡である西別府祭祀遺跡（未掲載・旧湯殿神社祭祀遺跡）、さらには、幡羅郡衙に比定されている幡羅遺跡（未掲載）が連なるのである。

古墳時代後期における西部地域の集落遺跡は、櫛挽台地東端部では、多くの遺跡が存在し、いずれも奈良・平安時代へと継続している。

また妻沼低地の自然堤防上では、熊谷市域の一本木前遺跡（20）、天神下遺跡（25）、飯塚南遺跡（4）、道ヶ谷戸遺跡（58）等、遺跡数・規模共に爆発的に拡大する。

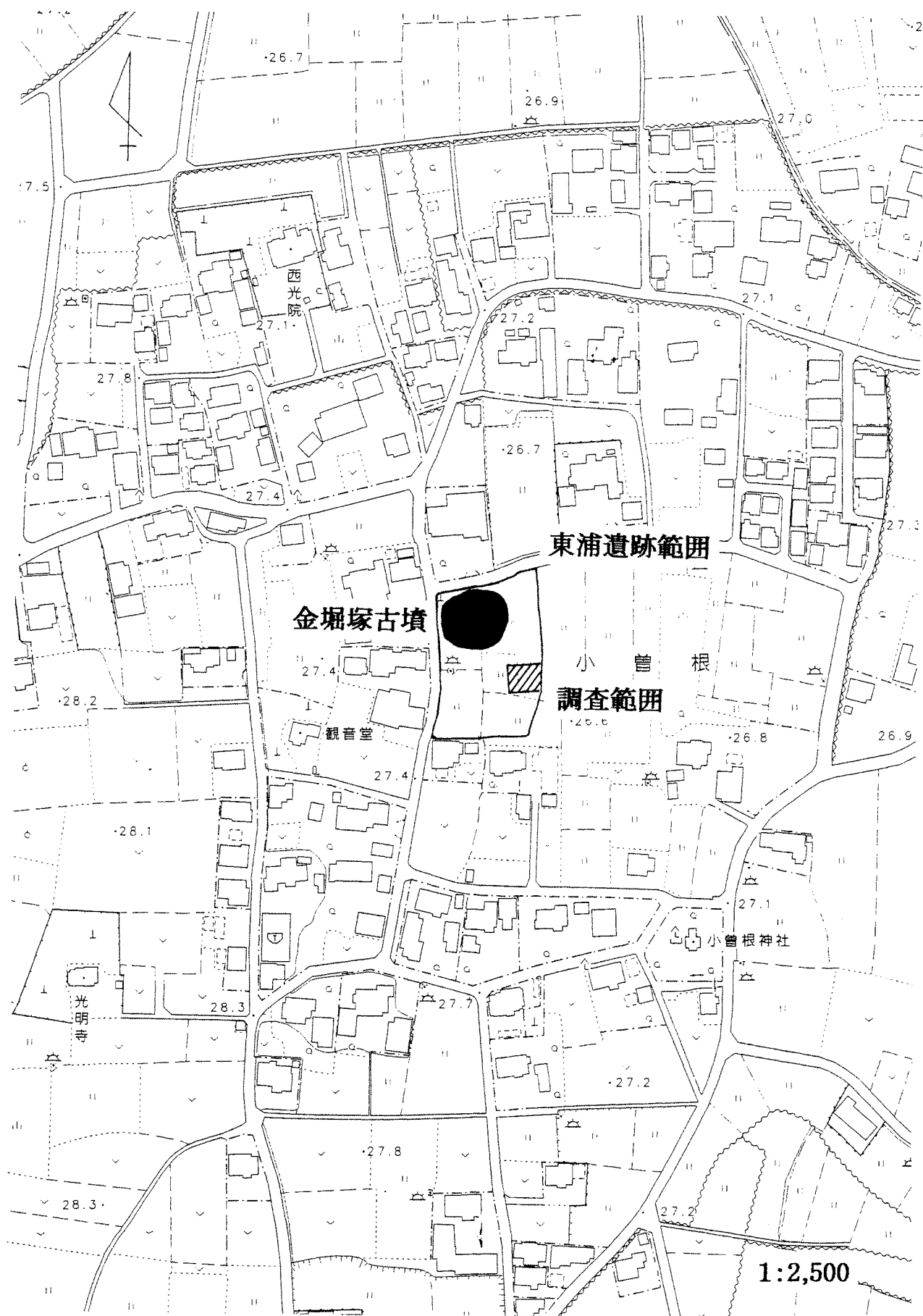
特に一本木前遺跡では、300軒を越える住居跡が検出され、その規模は群を抜いている。また一本木前遺跡では、河川の入り江脇、住居内（廃絶後）に数ヵ所の祭祀跡が検出され

ている。河川の入り江脇祭祀跡（A区1号祭祀跡）では、入り江の南岸に平坦面を作り出し、礫が敷かれていた。その北東端に馬の下顎が置かれ、東辺に須恵器の甕、これから西へ鍵形に連続した平坦面北端に土師器の甕が配され（河川と平坦面の境界に土師器甕類が配されていたことになる）ていた。そして甕類の南側に須恵器・土師器杯と土錘、白玉等の滑石製模造品が配されていたものである。またD・E区4号遺構も礫・馬歯・土器群・管玉・土錘等が検出されており、A区1号祭祀跡と同様な性格が考えられている。いずれも7世紀初頃の所産と考えられている。また住居内（廃絶後）の祭祀跡は数ヶ所検出され、馬歯を伴うものと伴わないもので、土器の配置状況に差がみられるとともに、古墳時代後期には模造品等を伴うのに対して、奈良時代には伴わなくなるという変化もみせている。

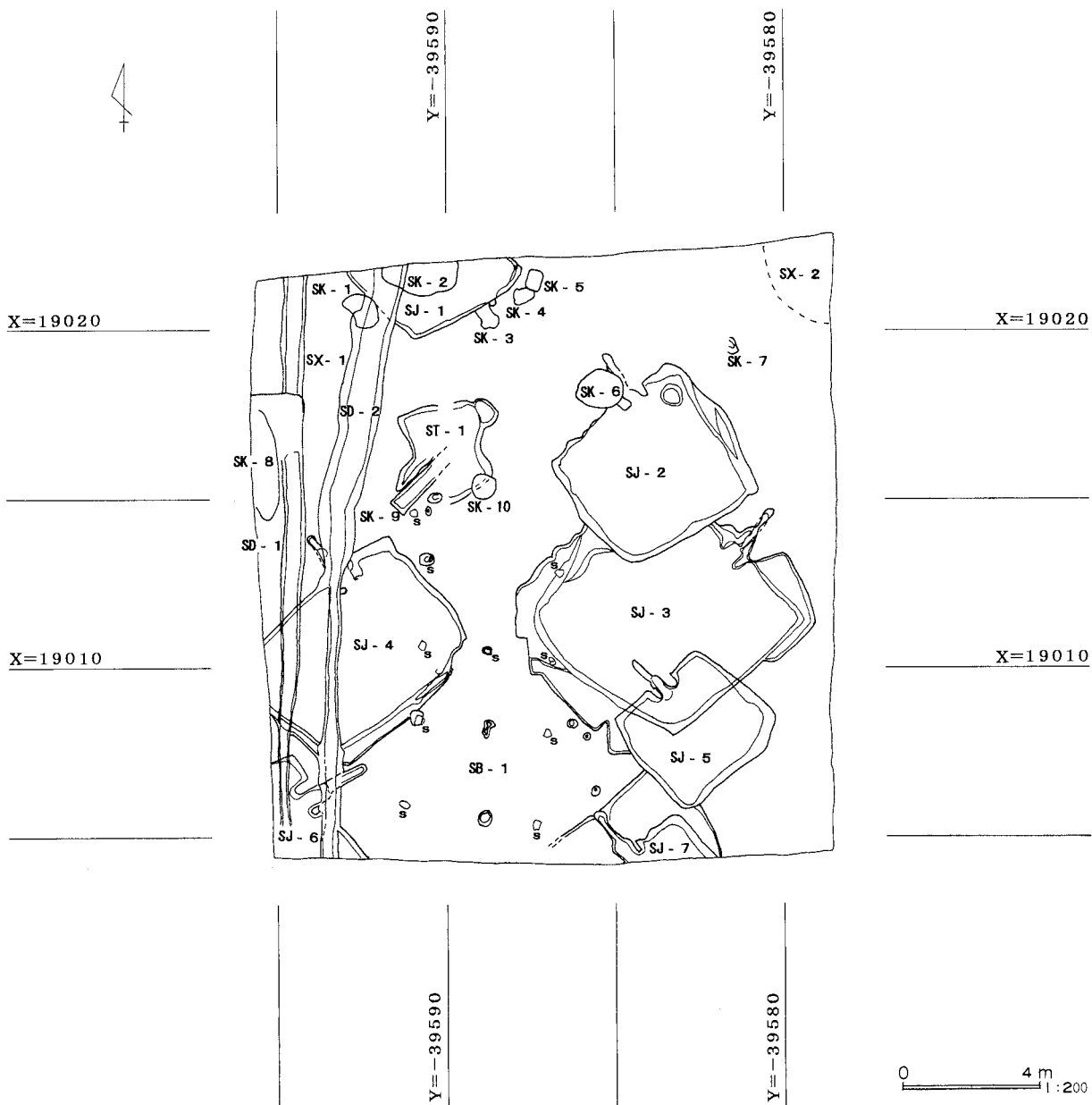
また東部地域でも北島遺跡（34）、諏訪木遺跡（51）、中島遺跡（32）・光屋敷遺跡（12）・常光院東遺跡（31に含まれる）、前中西遺跡（50）、行田市小敷田遺跡（53）、池守遺跡（未掲載）等、やはり遺跡数・規模共に爆発的に拡大する。

このうち諏訪木遺跡（51）では、河川に伴う祭祀跡が5ヶ所で検出されている。B地点では、古墳時代後期（6世紀後半から7世紀代）の土器群と共に馬頭蓋骨、木製壺鐙・堅杵等の木製品、白玉等が出土している。このB地点よりわずかに上流のF地点では、8世紀から11世紀に及ぶ遺物群と共に馬形、斎串、馬頭骨等が出土している。またB地点より下流のC地点では、3ヶ所で祭祀遺物が出土している。このうち2ヶ所では、6世紀後半から8世紀代の遺物群と9世紀から11世紀に及ぶ遺物群が重複して検出されている。他の1ヶ所は6世紀後半から8世紀代の遺物群である。これは重複した2ヶ所部分と単独の1ヶ所部分の間で9世紀に成された、瀬替えに伴うもの（年代の異なる遺物群の出土した位置は、瀬替え後も流路として生きている場所である。結果、流路が違っても祭祀場所は変化しなかったことを物語っている）である。6世紀後半から8世紀代の遺物群には、土器類と共に滑石製白玉、有孔円板型模造品、勾玉・小玉・丸玉・管玉等の玉類、ミニチュア土器、刀型・弓等の木製品、また木製の櫛、被熱して溶解した銅椀、馬歯なども出土している。一方、9世紀から11世紀に及ぶ遺物群は、斎串、人形と共に、石製?帯具の巡方、三彩陶器小壺、馬頭蓋骨等が出土している。こうした古墳時代後期から平安時代に至る出土遺物の変化は、河川祭祀の質的变化を直接示す、貴重な資料となっている。

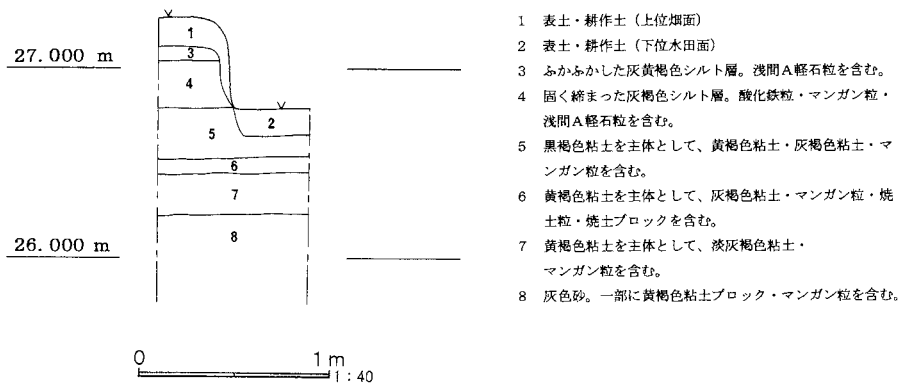
古墳時代以降 古墳時代後期に櫛挽台地東端もしくは北東端、あるいは妻沼低地及び熊谷扇状地の微高地に形成された集落は、あるいは古墳時代後期で終焉を迎える遺跡、あるいは古墳時代後期の途中から出現する遺跡、あるいはまた律令制下に出現する遺跡等も存在し、その数はわずかに減ずるものの、そのほとんどが奈良・平安時代集落へと継続されていく。そして、櫛挽台地北東端部の幡羅郡衙の想定される西別府廃寺（未掲載）、西別府祭祀遺跡（未掲載）、深谷市から熊谷市にかけて広がる幡羅遺跡（未掲載）の所在する櫛挽台地北東端部を中心として、北側妻沼低地上に展開される別府条里跡（19）、条里跡の東端に位置する一本木前遺跡（20）への広がり、東部では北島遺跡（34）、諏訪木遺跡（51）を中心として、その北・東に展開される中条条里遺跡（37）への広がり、こうした東西の二つの拠点を核として、以後の展開をみることとなるのである。



第3図 東浦遺跡調査区位置図



第4図 東浦遺跡調査区全測図



第5図 東浦遺跡基本土層図

III 遺跡の概要

1 調査の方法と成果

(第4図) 発掘調査は、調査区全体を国家座標軸に一致させ、一辺5mのグリッド方式をとった。グリッド名は、北東隅から西に向け1・2……とし、西端に至って東端に戻り、一段南のグリッドで再び西に向け続き番号を付した。この結果グリッド名は、1～24となった。

発掘調査は、遺物包含層上面まで重機で掘り下げた後、上記のグリッド設定を行ったものである。ちなみに第1グリッドの南西隅ポイントは、国家座標 $X=19020$ 、 $Y=-39580$ 交点に一致している。その後、人力によって遺物包含層精査及び遺構確認調査を実施した。包含層中の遺物は土師器細片が大部分であり、図示し得る個体は僅かであった。確認された各遺構は、手掘りでの掘り下げを行い、途中検出された遺物は、必要に応じて写真撮影・測量をした後、慎重に取り上げ、収納していった。また遺構に対しても、掘り下げ途中で必要に応じて、又は完掘時に写真撮影・測量を実施した。遺物出土状況・遺構検出状況の測量実測は、グリッド基本杭を基準として、水系による1mメッシュを設定する簡易遣り方の方法をとった。

本調査によって検出された遺構は、竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構1基、土坑10基、溝跡2条等である。また、底面が不規則な凹凸をもつ状況（不明遺構）が2ヶ所でみられた。このうち古墳時代後期に属すると思われる遺構は、7軒の住居跡、1基の竪穴状遺構、5基の土坑（第3・4・5・7・9号土坑）、1基の不明遺構（第2号）である。掘立柱建物跡、2基の土坑（第6・10号土坑）、1条の溝跡（第2号）及び1基の不明遺構（第1号）は中世、他の3基の土坑（第1・2・8号土坑）および1条の溝跡（第1号）は近世の所産である。

2 基本土層

(第5図) 現状では、東側が採土（第3・第4層及び第5層の上面）されて上下2段となり、上位面は畑（耕作土・第1層）、下位面は水田（耕作土・第2層）として利用されている。第3・第4層は、いずれも浅間A軽石粒を含む灰黄褐色シルト層であるが、下位層である第4層には酸化鉄粒、マンガン粒が多量に含まれている。また第3層がフカフカしているのに対し第4層は、硬く締まり、含有されている浅間A軽石粒も小粒である。

古墳時代後期の遺物包含層は、灰褐色粘土、マンガン粒、焼土粒・ブロックを含む黄褐色粘土を主体とした第6層である。しかし遺構の基盤層（主に壁体を構成している）第7層と比してややシルト化した土層が包含層となっている場合も多い。

各遺構の底面は、灰色砂層・第8層である。この第8層は、東側（遺跡外）で約50cm下位に堆積し、地形の傾斜を示している。

IV 遺構と遺物

1 住居跡

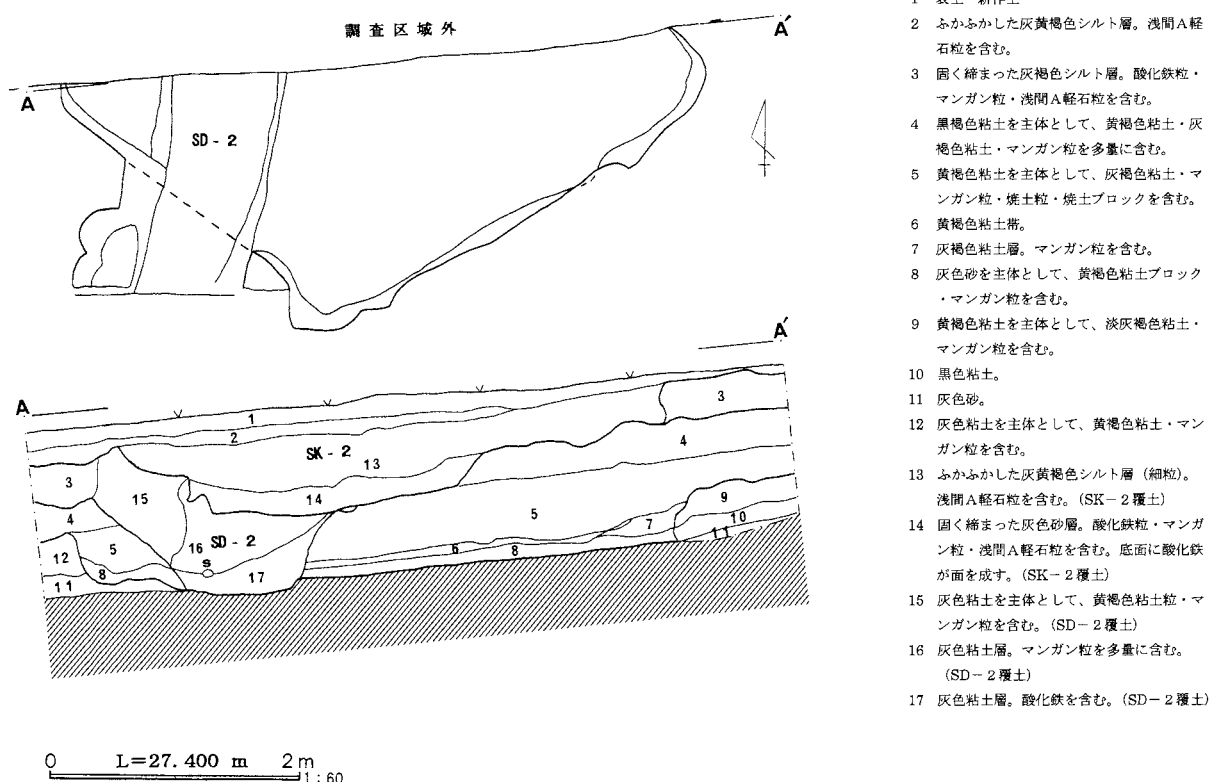
第1号住居跡 調査区北端の3・4グリッドに位置している。南端部分のみの調査である。西側部分を(第6図) 第2号溝跡に切断され、上面には第2号土坑が位置している。

(第7図) 辺長は、南東辺が3.90m、南西辺の現長3.0m、北東辺の現長0.5mが知れるのみである。東隅の角度が 90° 以下であり、南隅の角度が 90° 以上であるため菱形の感を呈するが、方形を基本とした形態を呈するものと思われる。南東辺方位は、 $N-57^\circ-E$ を示す。

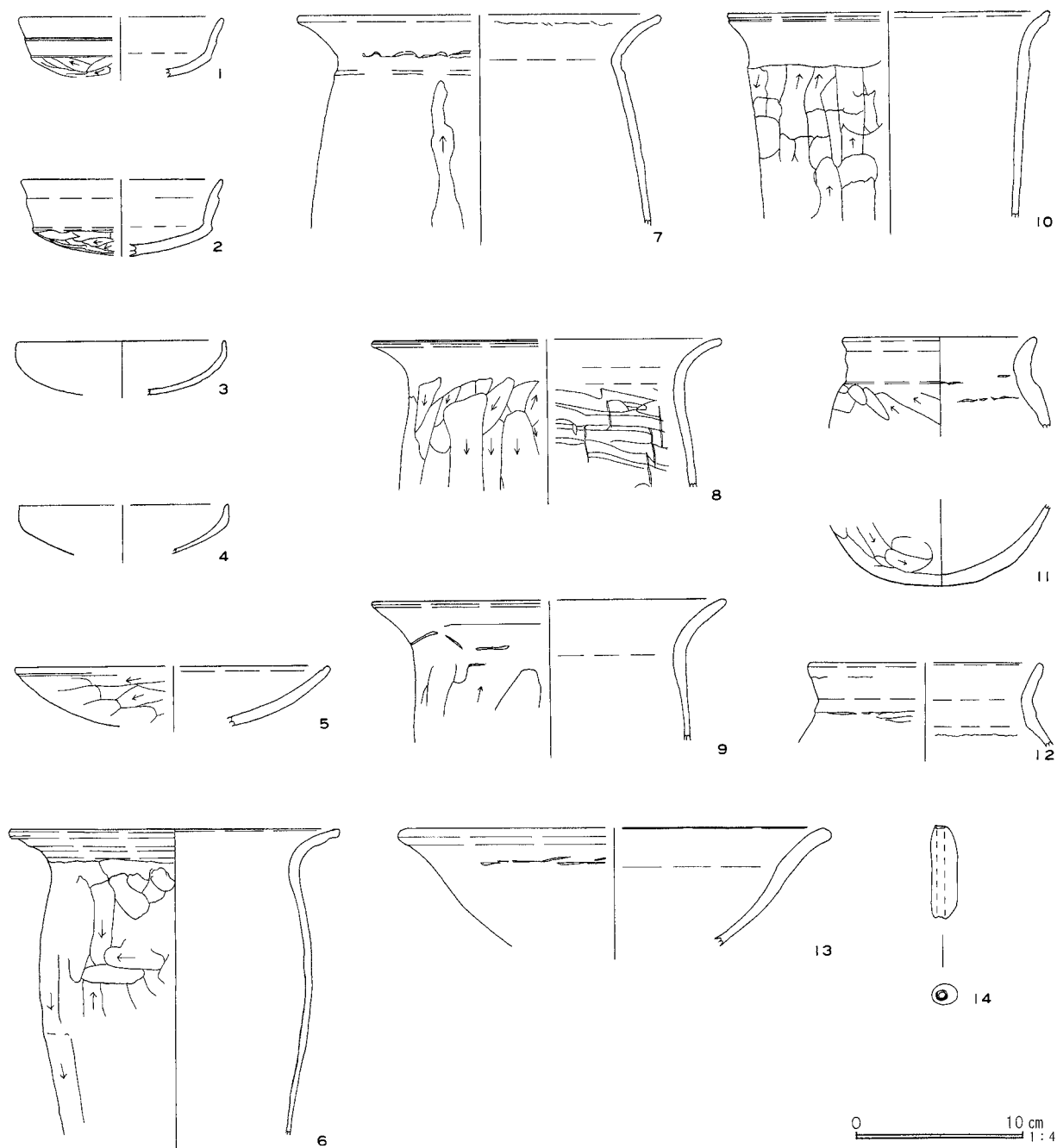
壁は、やや崩落して緩斜面を成している。深さは40～50cmである。カマドは検出されていないが、北東辺側の覆土中に焼土・炭化物がみられることから、北東辺側に設置されていた可能性が高い。床面は、砂層で構成されているが安定し、ほぼ水平面を成す。

覆土は、下位の黄褐色粘土ブロックとマンガン粒を含む灰色砂層(第8層)、上位の灰褐色粘土・マンガン・焼土粒、焼土ブロックを含む黄褐色粘土層(第5層)を基本とし、両層の間に黄褐色粘土帯(第6層・中央付近に堆積)、マンガン粒を含む灰褐色粘土層(第7層・東隅付近に堆積)が堆積している。

遺物は、東隅から南東辺部分に集中しており、坏・甕・鉢等の土師器が東から中央に流れ込む様相(第8層中)で、また南東壁直下の床面上では、長円礫が7点検出されている。



第6図 第1号住居跡



第7図 第1号住居跡出土遺物

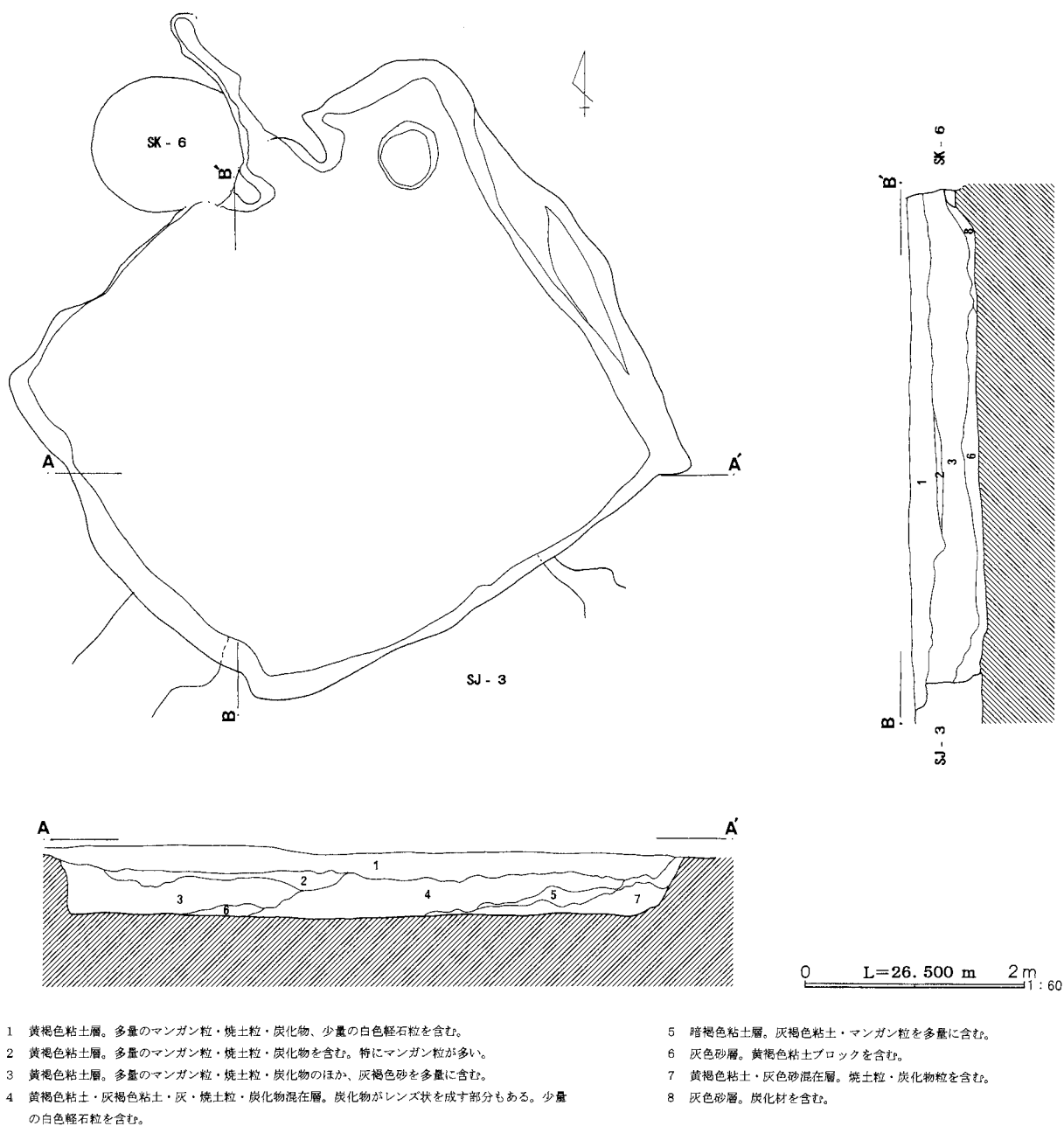
第1表 第1号住居跡出土遺物観察表

No	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	土師器・坏	(12.6)	—	—	BACKJ	B	にぶい橙7.5YR6/4	1/3	口縁部横ナデ(2段)。内面全面回転のナデ。体部外面ケズリ、黒色化。
2	土師器・坏	(12.2)	4.7	—	EABJI	B	明赤褐2.5YR5/8	2/5	口縁部2段の横ナデ(2段)。体部外面ケズリ、内面回転のナデ。内面は表面剝離した部分が多い。
3	土師器・坏	12.7	—	—	EMJ	B	橙7.5YR7/6	2/5	表面全面磨滅。
4	土師器・坏	(11.8)	—	—	JEMI	B	橙7.5YR6/6	1/7	表面全面磨滅。
5	土師器・坏	(19.6)	—	—	MAIN	B	橙7.5YR6/8	2/5	体部外面ケズリ。他は大部分表面磨滅。
6	土師器・甕	20.2	—	—	AMJEB	B	にぶい橙7.5YR7/4	上位1/2	口唇部略矩形を呈する。口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。
7	土師器・甕	(22.6)	—	—	BACKJ	B	にぶい橙7.5YR7/4	上位1/5	口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリ。内面ナデ。全体に表面剝離した部分が多い。

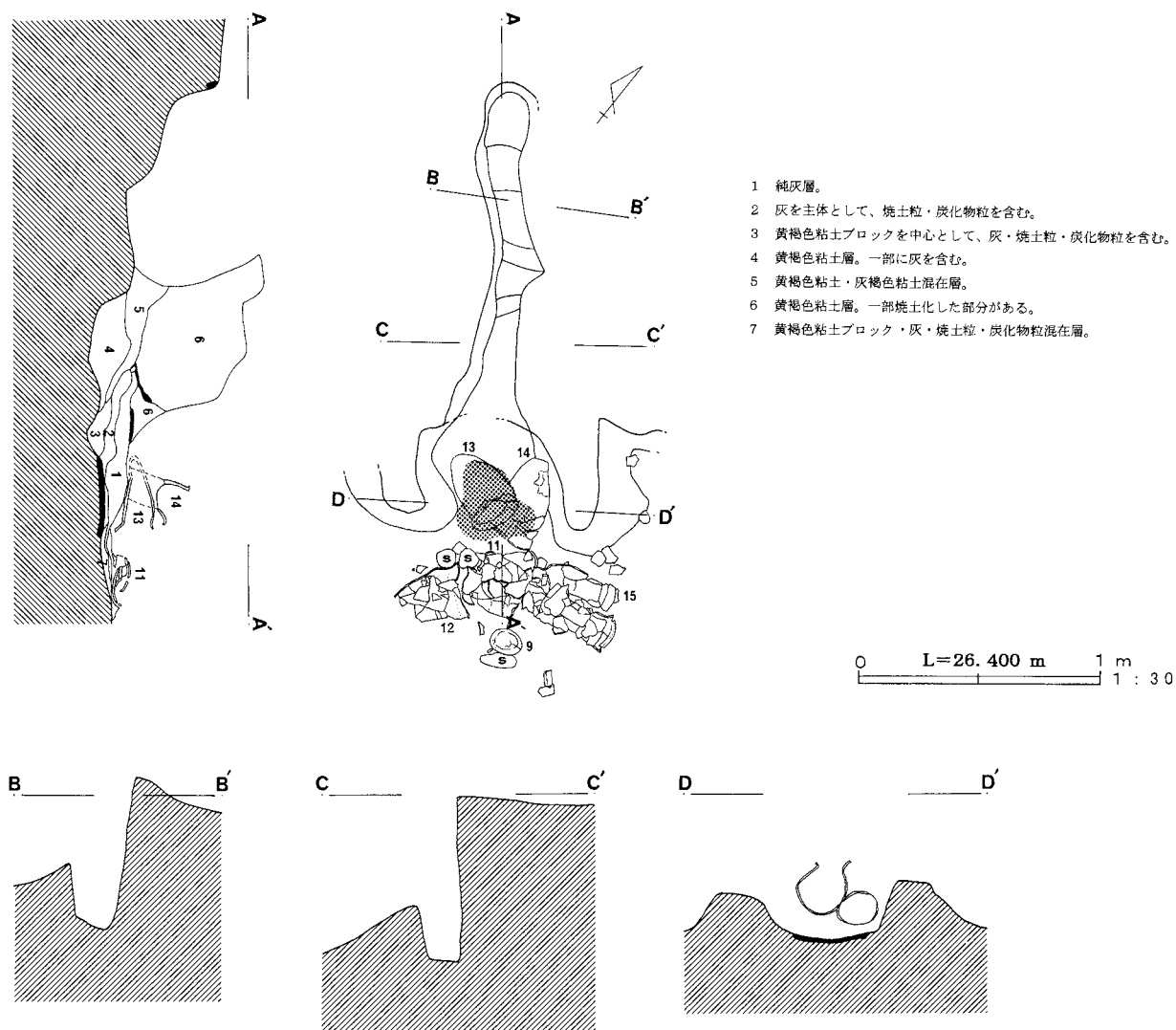
8	土師器・甕	(21.4)	—	—	ABMJIN	B	橙7.5YR6/6	口縁部1/3	口唇部略矩形。口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリ。内面横のヘラナデ。
9	土師器・甕	(21.6)	—	—	MAIBJNKG	B	橙5YR7/8	口縁部3/5	表面ほぼ全面磨滅。胴部外面縦のケズリ痕。
10	土師器・甕	(19.7)	—	—	MAEJ	B	橙5YR7/8	上位1/3	外面口縁部横のナデ、胴部縦のケズリ。内面ナデ、吸炭。
11	土師器・甕	12.0	—	—	CMIJN	B	淡橙5YR8/4	中位欠	口縁部横ナデ、内面に巻き上げ痕。胴部～底部外面ケズリ、内面ナデ。
12	土師器・甕	(14.5)	—	—	ABCEIK	B	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部2/5	表面ほぼ全面磨滅。二次加熱。外面1/2吸炭。
13	土師器・鉢	(16.8)	—	—	ABCION	B	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部1/6	口縁部及び体部外面表面磨滅。体部内面ナデ、外面全面吸炭。
14	土錘	長さ5.7 径1.2 孔径0.9 重さ13.2g						完形	

第2号住居跡 調査区北寄りの3・4・12・13グリッドに位置している。北西側（カマド西脇）部分を（第8図） 第6号土坑に切断されているが、南部では第3号住居跡を切断している。

（第9図） 辺長は、北西辺が4.95m、北東辺が4.70m、南東辺が4.50m、南西辺が3.96mである。



第8図 第2号住居跡



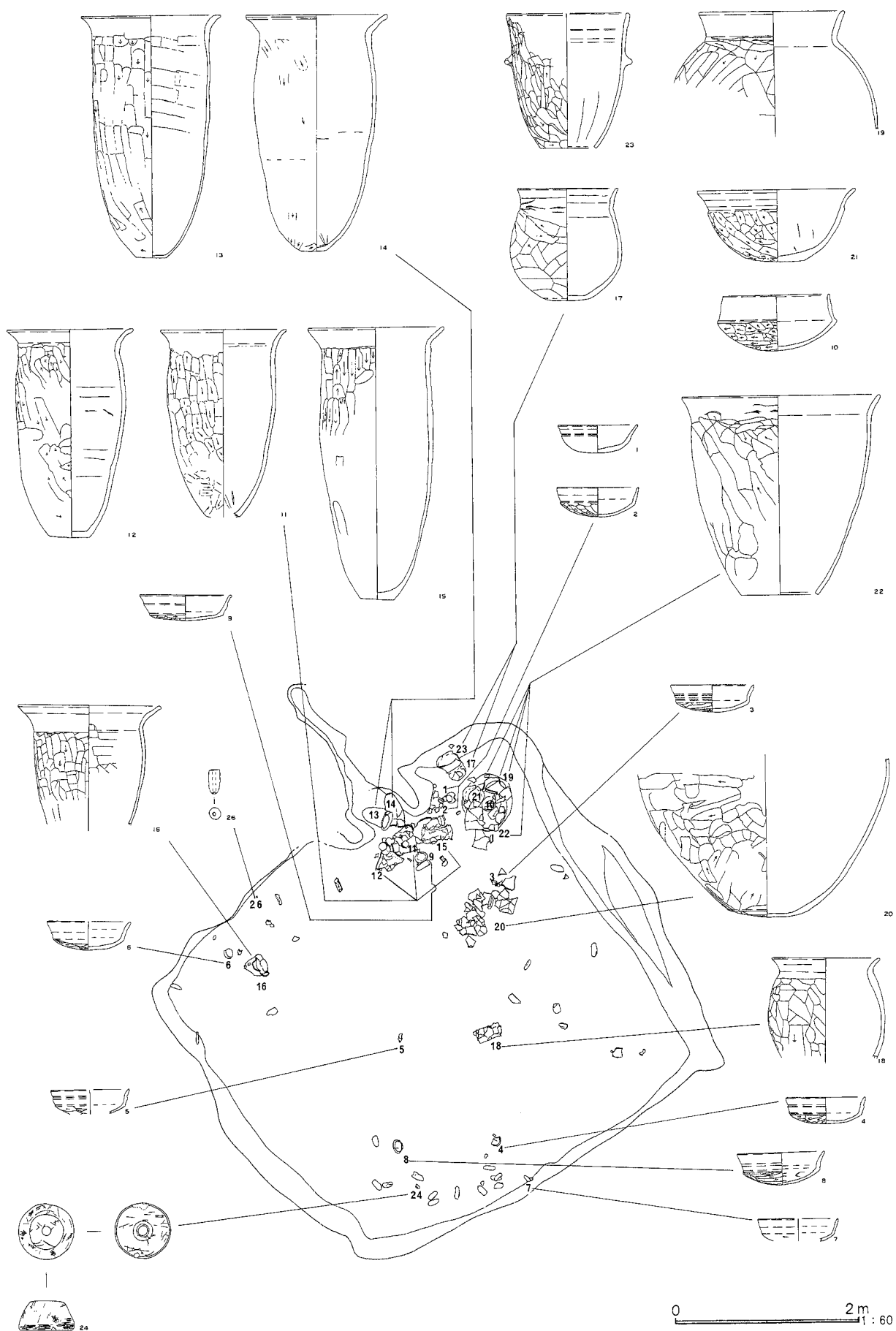
第9図 第2号住居跡カマド

(第10図) 南隅がやや丸みをもつが、ほぼ方形を呈する。主軸方位は、 $N-34^{\circ}-W$ を示す。

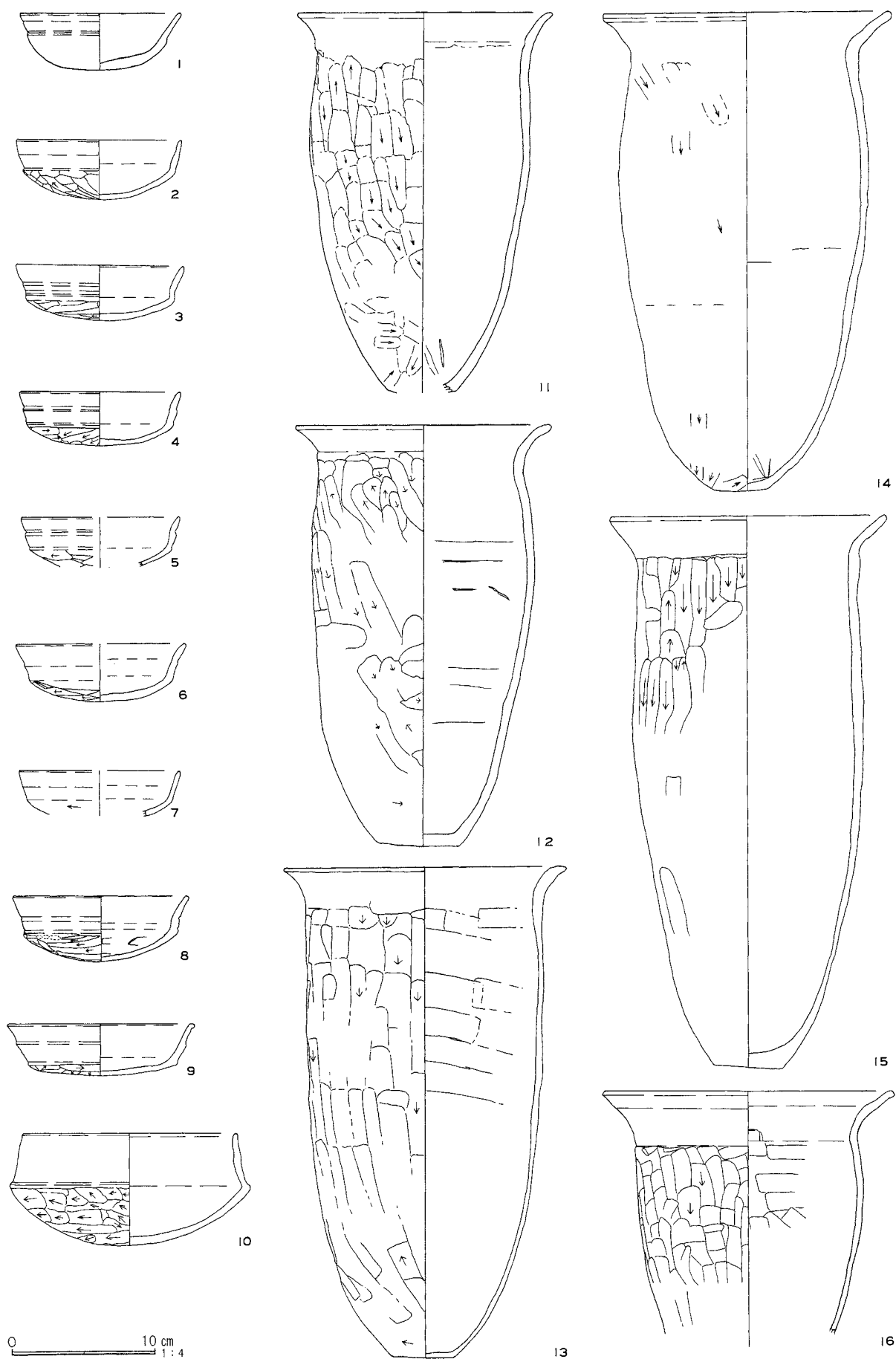
(第11図) 壁は、上位が一部崩落しているものの、ほぼ垂直の立ち上がりを残している。北東壁中

(第12図) 中央部では、壁上部が50cm程の幅で外側に段・平坦面をもっている。

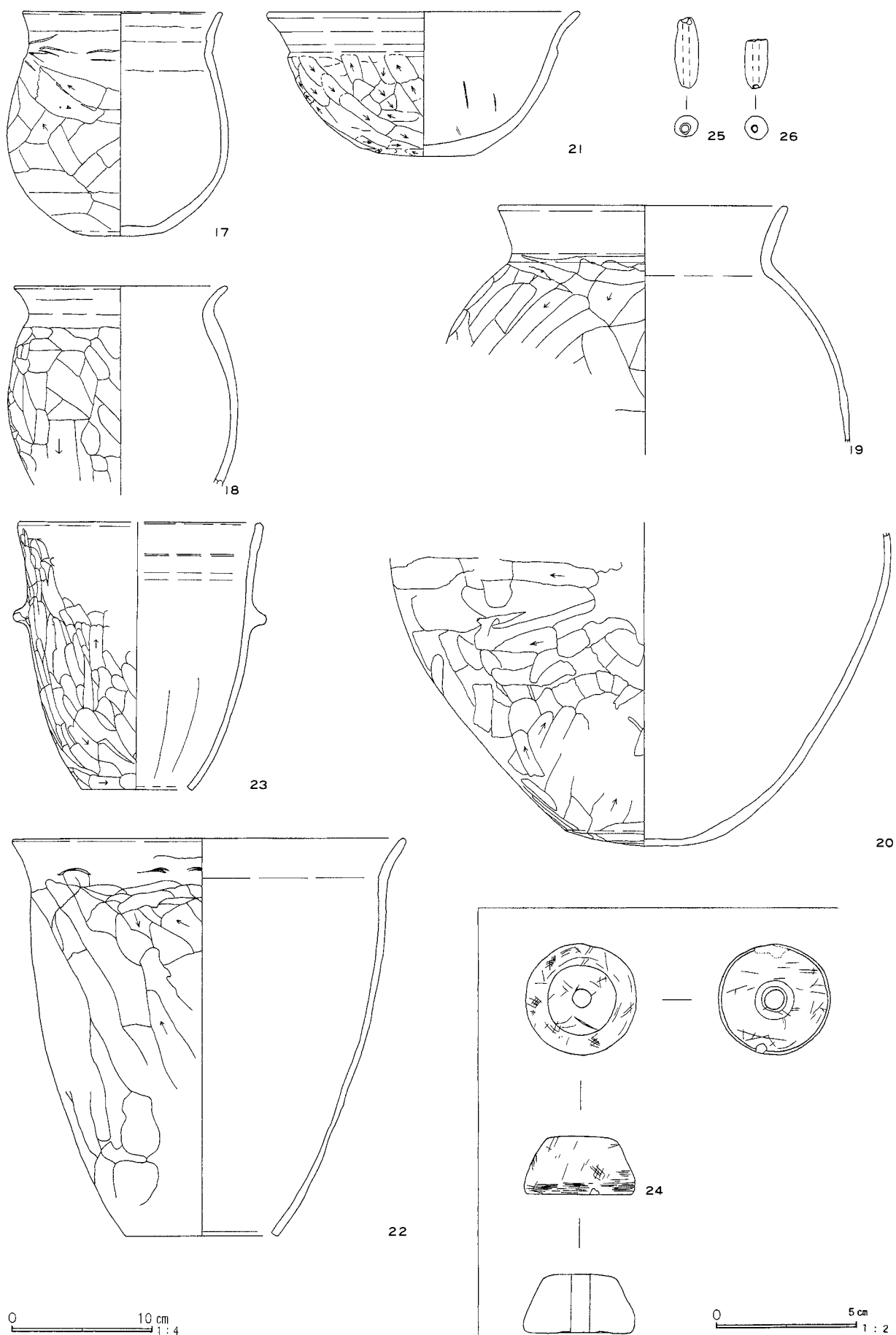
カマドは、北西辺側中央、やや北東寄りに設置されている。燃焼部は、全て竪穴内に位置し、長さ57cm、前面幅40cm、奥幅40cmを計り、奥がやや丸みをもつものの、長方形を呈するといえる。このうち火床は、 30×40 cm範囲でわずかに窪み、三つ葉様の三角形を呈する。燃焼部の奥は、壁ではなく二つの窪みを成し、煙道部の最下段を構成している。煙道部の中央からは1段目がやや下降気味の、2段目が上昇気味の緩斜面を成し奥壁部に至って垂直に上昇し、煙出し部となる。煙出し部上面の平面形は円形を呈する。煙道部の長さ140cm、火床から煙出し上面までの高さは52cmを計る。燃焼部では、土師器長甕No.13が西、No.14が東に並置され、口を南(前面)に向けて倒れていた。またカマド前面の床面上には、左(西)の袖から右の袖の間にカマド主軸と直交するように(カマド前面を塞ぐ形で)土師器長甕3個体が、No.12の口にNo.11の底、No.11の口にNo.15の底という入子状に、寝かせら



第10図 第2号住居跡遺物出土状況



第11図 第2号住居跡出土遺物①



第12図 第2号住居跡出土遺物②

第2表 第2号住居跡出土遺物観察表

No	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	土師器・坏	11.4	4.0	—	ABEMI	B	灰黄2.5Y7/2	ほぼ完形	ほぼ全面磨滅。内面一部ナデ。底部中央凹味。
2	土師器・坏	11.6	4.2	—	CBAI	B	橙2.5YR6/6	4/5	口縁部横ナデ。体部上端面取りナデツケ、他ケズリ。内面ナデ。
3	土師器・坏	12.0	3.9	—	ABIJM	B	橙2.5YR6/8	3/5	口縁部横ナデ(2段)。体部外面ケズリ、内面ナデ。
4	土師器・坏	11.5	3.8	—	BAECIJMN	B	赤褐2.5YR4/6	3/5	口縁部横ナデ(2段)。体部外面ケズリ、内面ナデ。内外面共吸炭。
5	土師器・坏	(11.4)	—	—	ABIEKHM	B	明赤褐2.5YR5/6	1/3	口縁部横ナデ(2段)。体部外面ケズリ、内面ナデ。内外面共吸炭。
6	土師器・坏	(12.3)	4.1	—	EBIJK	B	にぶい橙7.5YR7/4	2/5	口縁部横ナデ(2段)。体部外面ケズリ、内面ナデ。吸炭。
7	土師器・坏	(10.6)	—	—	BAEI	B	にぶい黄橙10YR6/4	1/6	口縁部横ナデ(2段)。体部外面ケズリ。内面ナデ、一部炭化物付着。
8	土師器・坏	12.6	4.7	—	BAEIJM	B	浅黄橙10YR8/3	完形	口縁部横ナデ(2段)。体部上端面取りナデツケ、他ケズリ、内面ナデ。内外面共1/2吸炭。
9	土師器・坏	13.4	3.7	—	BAIJCKMN	B	橙2.5YR6/8	ほぼ完形	口縁部横ナデ(2段)。体部外面ケズリ、内面ナデ。
10	土師器・坏	15.4	7.9	—	ABCIJKMN	B	橙2.5YR6/8	完形	口縁部横ナデ後ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。
11	土師器・甕	18.0	(27.3)	(4.7)	BAENIM	B	にぶい橙7.5YR6/4	底部欠	口縁部横ナデ。胴部外面縦、底部周辺斜のケズリ、煤付着。内面ナデ、下半吸炭。二次加熱。
12	土師器・甕	18.0	30.3	5.8	BAECIJHMN	B	明赤褐2.5YR5/6	一部欠	全体に磨滅した部分が多い。口縁部横ナデ。胴部外面縦、底部周辺ケズリ、一部煤付着。底部ケズリ。内面ナデ、輪積痕を残す。二次加熱。
13	土師器・甕	20.0	35.2	4.4	ABEIJMN	B	灰褐7.5YR5/2	一部欠	口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリ、底部周辺横のケズリ、煤付着、底面ケズリ。内面上位横のナデ、下位ナデ、中位以下吸炭。二次加熱。
14	土師器・甕	20.3	34.4	3.8	ABCEIJMN	B	橙5YR6/8	一部欠	全体に磨滅した部分が多い。口縁部横ナデ。胴部外面縦、底部周辺横のケズリ、煤付着、底面ケズリ。内面ナデ、下位吸炭。二次加熱。
15	土師器・甕	19.5	39.7	4.7	EBCAIMN	B	にぶい橙5YR6/4	下位一部欠	口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリ、下位は磨滅した部分が多い、吸炭、底面ケズリ後ナデ。内面ナデ、一部吸炭。二次加熱。
16	土師器・甕	20.8	(17.2)	—	ABEMIN	B	にぶい黄橙10YR7/2	上位	口縁部横ナデ、口唇部矩形。胴部外面、縦のケズリ、一部吸炭、炭化物付着。内面上位横のナデ、中位以下ナデ、全面吸炭。
17	土師器・甕	14.1	16.3	6.8	EBN	B	橙7.5YR6/6	一部欠	口縁部横ナデ、内外面に輪積痕を残す。胴部外面上位斜、下位横のケズリ、下位にはナデが加わる。一部吸炭。底面ケズリ。内面ヘラナデ。
18	土師器・甕	15.4	14.3	—	BEACIN	B	橙5YR6/6	2/3	口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリ、上位にはナデが加わる。内面横のナデ、中位以下吸炭。二次加熱。
19	土師器・甕	20.7	—	—	NCMA	B	にぶい橙5YR7/3	胴下半部欠	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ。内面ナデ、表面剝離した部分が多い。
20	土師器・甕	—	—	11.1	ADBEN	B	橙7.5YR7/6	下半	胴部外面横、底部周辺縦のケズリ、底面ケズリ、煤付着。内面ナデ、一部吸炭。二次加熱。
21	土師器・鉢	22.9	10.3	8.3	ABEINM	B	橙5YR6/6	完形	口縁部横ナデ。体部～底部外面ケズリ、やや丸底。内面横の丁寧なナデ。
22	土師器・甕	28.0	29.0	11.0	BAMCNI	B	灰褐7.5YR6/2	3/5	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ、下端部及び円孔部ナデが加わる。内面ナデ。内面下位の3/4、外面1/2吸炭。
23	土師器・甕	(17.5)	19.3	8.0	ABMGEO	B	にぶい黄橙10YR7/4	3/4	口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ後上位にナデが加わる。一部吸炭。内面上位横、下位縦のナデ、吸炭。円孔部ケズリ。
24	紡錘車	上端径2.5 下端径4.0 高さ2.1 孔径0.7 重さ55.9g						完形	
25	土錘	長さ5.0 径1.7 孔径0.5 重さ11.2g						一部欠	
26	土錘	長さ3.5 径1.7 孔径0.4 重さ9.9g						一部欠	

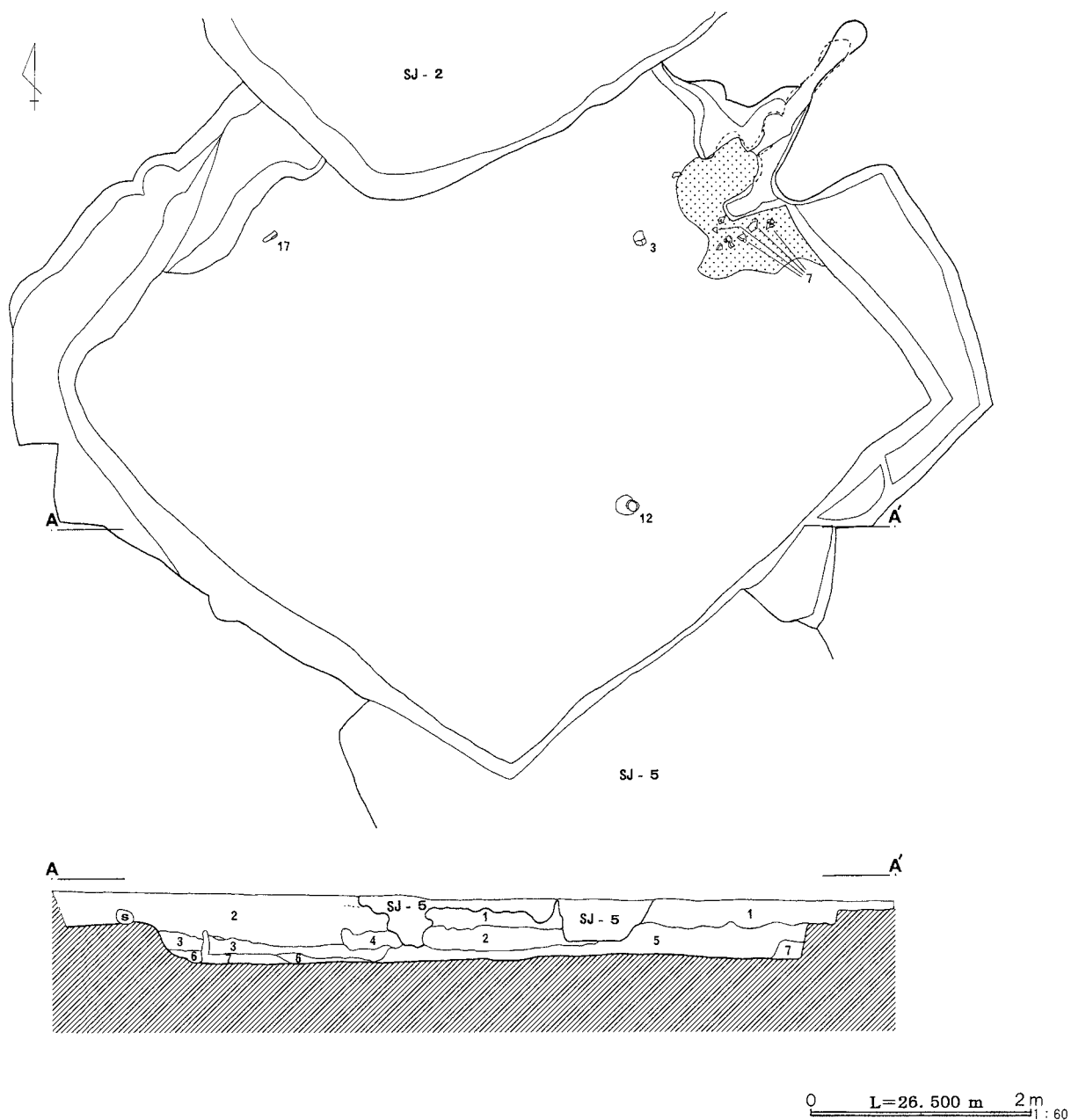
れていた。さらにNo11の前面には土師器坏No9が長円礫を下敷きにする様な状況で検出されている。

覆土は、大部分が黄褐色粘土層（第1・2・3・4・7層）であり、暗褐色粘土層（第5層）、灰色砂層（第6・8層）が部分的に堆積する状況である。

床面は、砂層で構成されているが安定し、ほぼ水平面を成す。カマド右脇・竪穴北隅には38×43cm、深さ25cmの貯蔵穴が穿たれ、土師器坏・No10、甕・No19、鉢・No21、甕・No22が検出されている。カマド・貯蔵穴以外の遺物は、カマド右脇壁に寄りかかるように土師

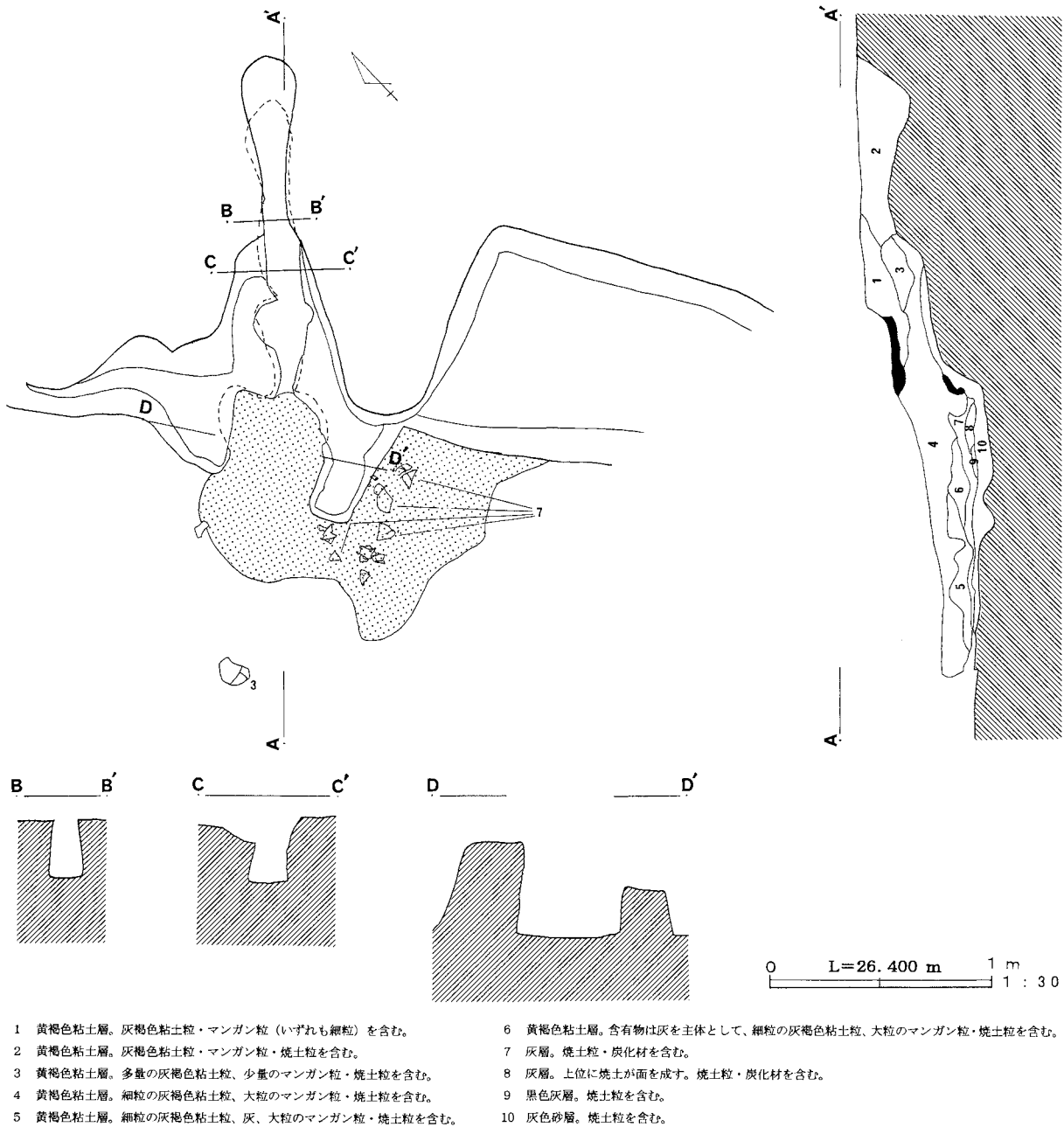
器小型甕・No17の口に甕No23が入れられて立てられていた。また南隅付近の床面上からは長円礫と共に土師器坏・No. 4・7・8、石製紡錘車・No24が集中した状況で検出されている。さらにじめ、他の床面上からも土師器甕・坏等が検出されている。

第3号住居跡 調査区中央東寄りの11・12・13・14・17・18グリッドに位置している。北側部分を第2号住居跡に、南側部分を第5号住居跡によって切断されている。また西側上面は、第1号



- | | |
|---------------------------------------|---------------------------|
| 1 灰色粘土層。黄褐色粘土粒・マンガン粒を含む。 | 5 灰色シルト層。黄褐色粘土粒・マンガン粒を含む。 |
| 2 灰色粘土（シルト質）層。黄褐色粘土粒・多量のマンガン粒（大粒）を含む。 | 6 黄褐色粘土・灰色砂混在層。 |
| 3 灰色粘土（シルト質）層。黄褐色粘土粒・マンガン粒を含む。 | 7 灰色砂層。マンガン粒を含む。 |
| 4 灰色粘土（シルト質）層。多量の黄褐色粘土粒及び、マンガン粒を含む。 | |

第13図 第3号住居跡



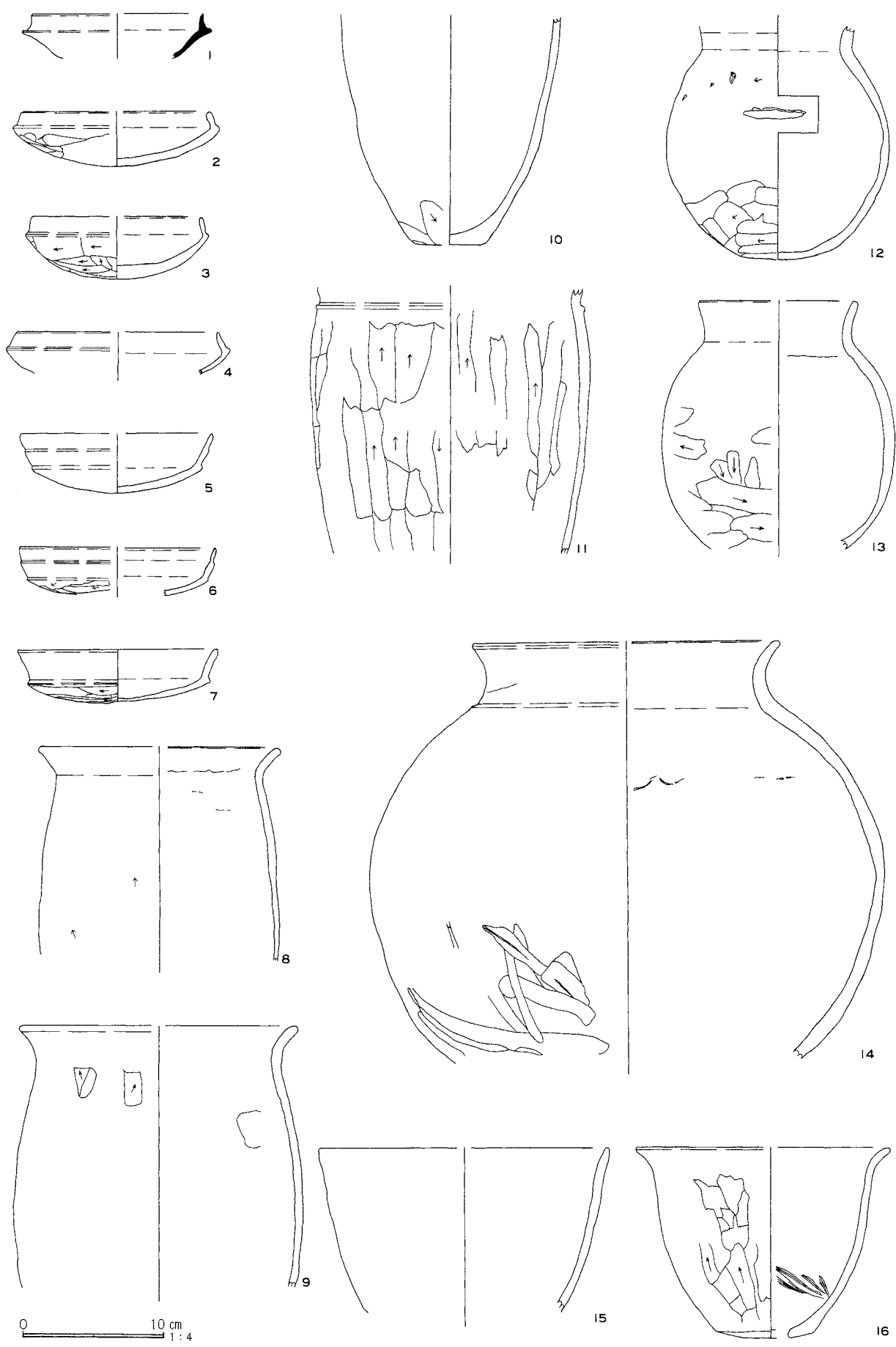
第14図 第3号住居跡カマド

(第14図) 掘立柱建物跡によって削平されている。

(第15図) 辺長は、北隅が第2号住居跡によって床面まで切断されているため南東辺が5.28m、南

(第16図) 西辺が5.56mが計測できるのみであるが、ほぼ方形を呈すると思われる。主軸方位は、N-43°-Eを示す。壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、西側では崩落した部分が多い。東部及び西部の他遺構と重複していない部分では、壁上部が50cm前後の幅、深さ10~20cmで外側に段・平坦面をもっている。

カマドは、北東辺側中央、やや南東寄りに設置されている。燃焼部は、全て竪穴内に位置し、長さ50cm、前面幅44cm、奥幅42cmを計り、奥がやや丸みをもつものの、矩形を呈するといえる。明確な火床は、確認できていないが、二箇所の窪みをもつ。燃焼部の奥は、



第15図 第3号住居跡出土遺物①



第16図 第3号住居跡出土遺物②

第3表 第3号住居跡出土遺物観察表

No	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	須恵器・坏	(12.4)	—	—	LBM	B	灰白2.5Y7/1	口縁部1/4	—
2	土師器・坏	(13.5)	3.9	—	AGEIBN	B	明赤褐2.5YR4/6	3/5	口縁部横ナデ。体部内面ナデ、外面ケズリ。黒色化。
3	土師器・坏	(12.3)	4.5	—	BAJKE	B	にぶい褐7.5YR5/4	2/3	口縁部横ナデ。体部内面回転のナデ、外面ケズリ。黒色化。
4	土師器・坏	(14.5)	—	—	BCEAM	B	浅黄橙7.5YR8/6	口縁部1/4	表面全面磨滅。
5	土師器・坏	(14.2)	4.3	—	DMAIN	B	橙2.5YR6/6	1/2	口縁部横ナデ。体部内面ナデ。外面ほぼ全面磨滅。
6	土師器・坏	(14.3)	—	—	BADJK	B	赤褐5YR5/6	口縁部1/4	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。黒色化。
7	土師器・坏	14.5	3.9	—	MNIJ	B	橙2.5YR6/6	4/5	口縁部横ナデ。体部内面ナデ、外面ケズリ。内面の大部分磨滅。二次加熱。
8	土師器・甕	(17.6)	—	—	BDAIN	B	にぶい橙7.5YR6/4	上部1/4	口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリ後ナデ。内面ナデ、上位に一部接合痕。
9	土師器・甕	(20.0)	—	—	MNBALJ	B	にぶい橙5YR6/4	上位1/5	口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリ後ナデ。内面上位横、中位縦のナデ。
10	土師器・甕	—	—	(4.6)	MNAI	C	橙2.5YR6/6	下位のみ	外面ナデツケ、底部周囲ケズリ、底面ケズリ。内面ナデ、底部周囲横のナデ、吸炭、一部炭化物付着。二次加熱。
11	土師器・甕	—	—	—	MEBNJ	B	橙5YR6/6	上位1/4	口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリ。残体周辺部吸炭、二次加熱。
12	土師器・甕	—	—	6.7	AMIN	B	橙2.5YR6/6	口縁部欠	口縁部横ナデ。胴部外面上～中位斜のケズリ後ナデ、下位斜～横のケズリ。内面上位ヘラによる横のナデ、下位ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。胴部との境に稜をもつものの丸底。
13	土師器・甕	(11.5)	—	—	BANEK	B	橙5YR6/6	底部欠	口縁～肩部内外面共磨滅。胴部外面中位～下位横のケズリ、中位に縦のケズリが加わる。内面ナデ、全面に吸炭。二次加熱。
14	土師器・甕	(21.6)	—	—	BACEIJNG	B	橙5YR7/6	1/3	口縁部横ナデ、外面胴部との接合面に指頭によるナデが加わる。胴部外面ケズリ、上位にはナデが加わる。内面ナデ、表面剝離した部分が多い。
15	土師器・鉢	(20.9)	—	—	MBANEI	B	にぶい橙5YR7/3	上位1/4	全面ナデ。中位吸炭。

16	土師器・甕	(18.3)	13.7	7.1	MABEN	B	橙5YR6/6	1/2	口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリ。内面上位横、ヘラ先によるナデ。底外面ケズリ、円孔部ケズリ。
17	砥石	長さ13.1 最大幅3.6 最小幅2.0							ほぼ完形
18	土鍾	長さ5.1 径1.4 孔径0.6 重さ11.1g							一部欠
19	土鍾	長さ4.3 径1.8 孔径0.6 重さ11.2g							ほぼ完形

急傾斜の壁を成し、煙道部へと連続している。煙道部は、ほぼ水平な1段目、下降する2段目という、二段を有し、奥壁部に至って急傾斜をもって上昇し、煙出し部となる。煙道部の長さは156cmを計る。

床面は、砂層で構成されているが安定し、ほぼ水平面を成す。覆土は、灰色シルト層(第2～第5層であり、黄褐色粘土粒及びマンガン粒の量、あるいは粒の大小によって区分されている)が主体となり、上位に灰色粘土層(第1層)、壁際の最下位に灰色砂層(第7層)及び黄褐色粘土と灰色砂の混在層(第6層)が堆積している。

遺物は、カマド周囲から須恵器坏(No.1)及び土師器坏(No.3)、南東中央の壁寄りから土師器甕(No.12)、北西壁直下から砥石(No.17)が出土したのをはじめ、北東壁東隅寄りから竪穴中央部にかけて、土師器坏・甕・甗等いずれも割れた状態で、集中して検出されている。

第4号住居跡 調査区西側の13・14・15・19・20グリッドに位置している。中央部分を第2号溝跡によ

(第17図) て切断され、西寄り部分を第1号溝跡によって削平されている。また東側上面には第1号

(第18図) 掘立柱建物跡が位置している。

(第19図) 西隅が調査区域外に延伸しているため、全体の規模は不明確であるが、南東辺が5.25m、

(第20図) 北東辺が3.92mの二辺が計測できるのみであるが、各辺やや脹らみをもち、長軸6.1m×短

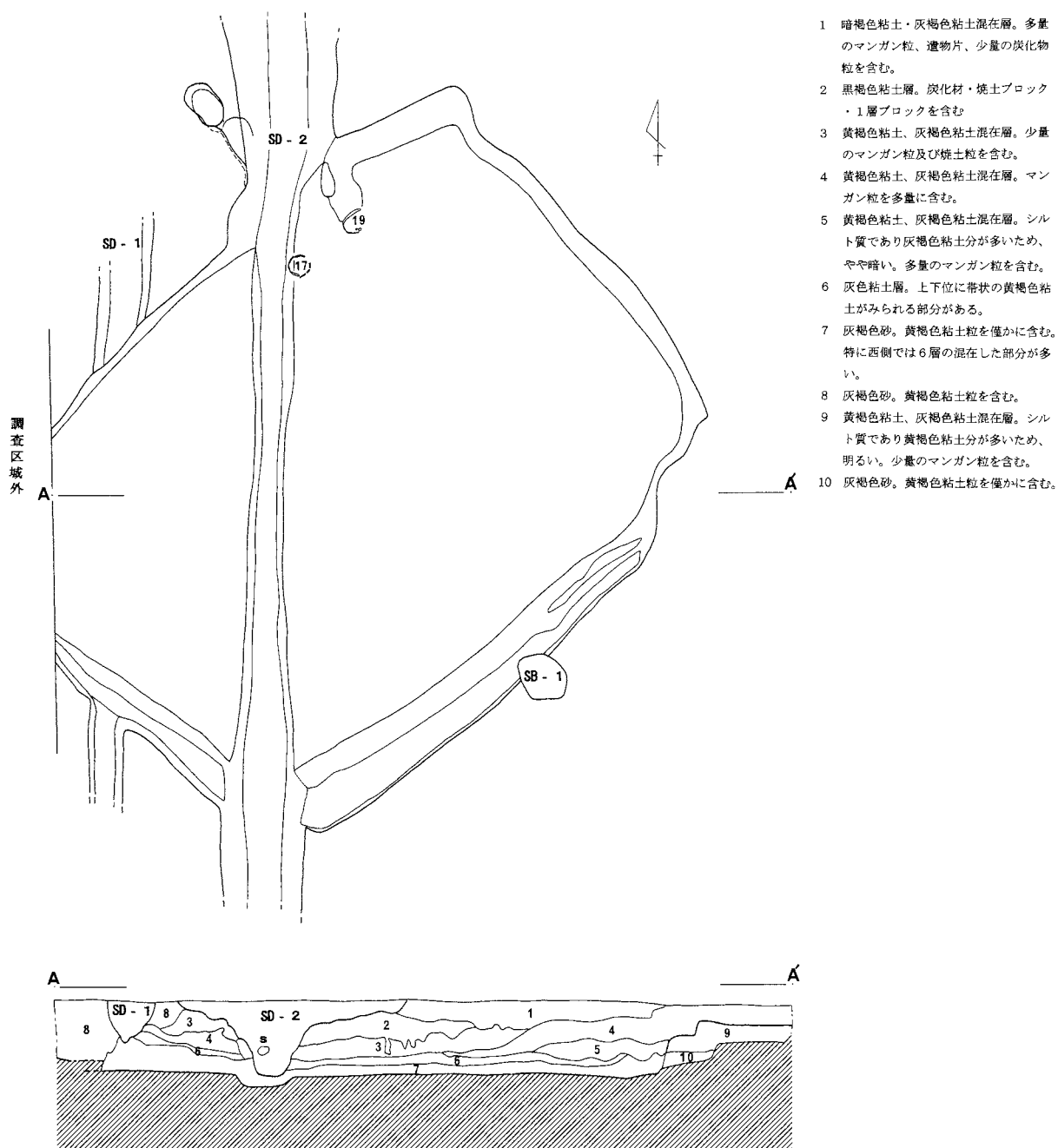
(第21図) 軸4.8mの、ほぼ長方形を呈すると思われる。主軸方位は短軸側にあり、N-37°-Wを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、全体的に崩落した部分が多い。東南部及び南西部では、壁上部が40cm前後の幅、深さ10～20cmで外側に段・平坦面をもっている。

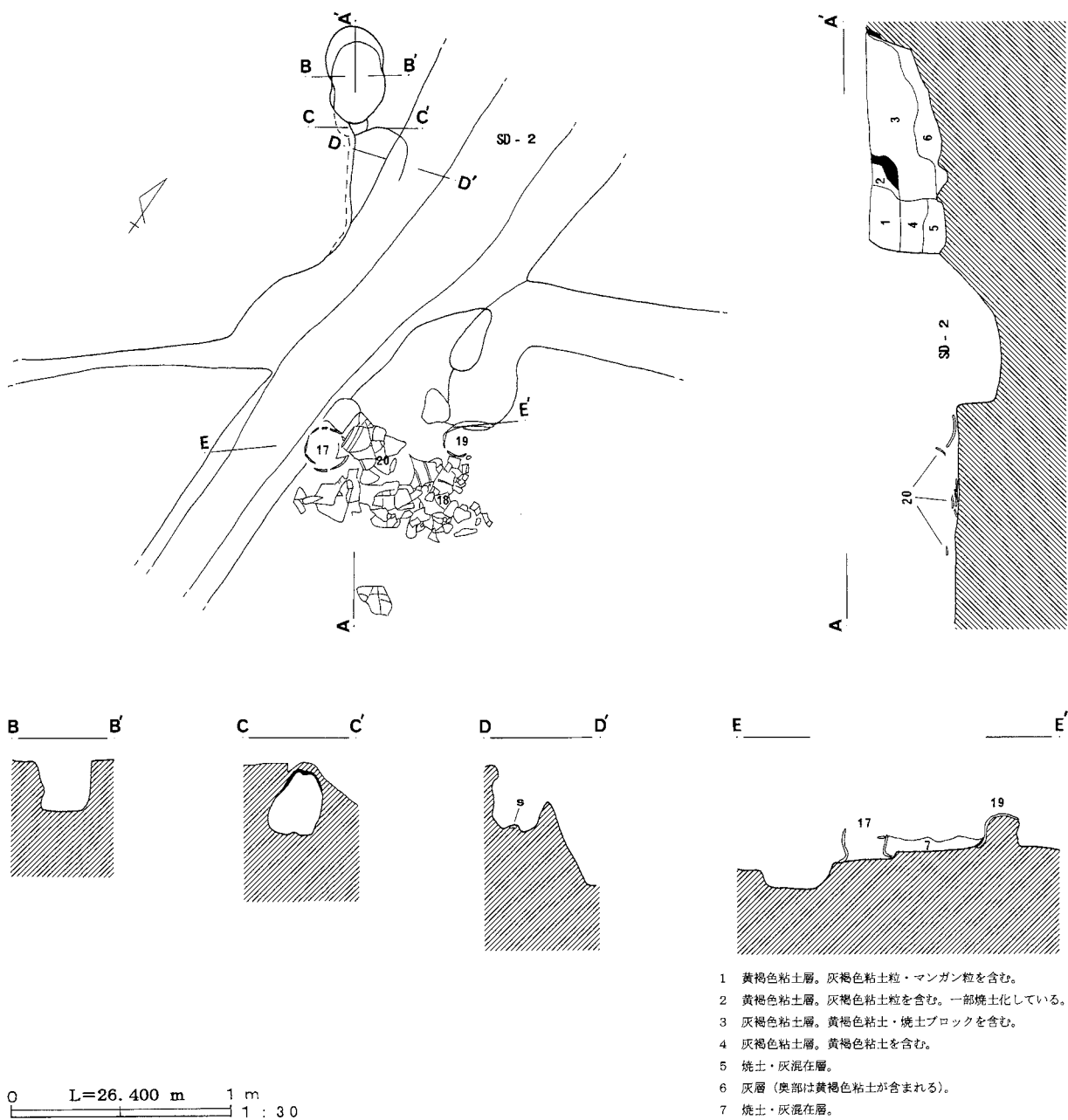
カマドは、長辺である北西辺北隅寄りに設置されているが、左袖から燃焼部奥壁、煙道部下段を第2号溝跡によって切断されている。両袖の前部には、土師器長甕が伏せた状態で立てられ(左No.17、右No.19)ている。燃焼部の全体の形状は、不詳であるといわざるを得ないが、全て竪穴内に位置しているものと思われる。長さ54cm、前面幅45cmを計り、残存した右袖側の形状からみると、奥がやや丸みをもつものの、矩形を呈するといえる。明確な火床は、確認できていないが、ほぼ平坦面を成している。燃焼部の奥壁の形状は不明である。煙道部上段は、僅かに凹凸を見せながら、奥壁部に向けて緩斜面を成して、徐々に上昇し、奥壁に至ってほぼ垂直に立ち上がり、煙出し部を形成している。煙道部の最も残状況の良い部分(第18図C-C'ライン)の断面形状は、天井部までの高さ28cm、最大幅23cmを計り、不整長円形を呈している。煙出し部は円形を呈し、径は25cmを計る。煙道部の長さは135cm前後を計るものと思われる。またカマド前面には、第2号住居跡例とは逆向き(口縁部を西側に向けて)に土師器長甕が入子状(No.18の中にNo.20)に倒れ、カマドを塞ぐ状況を呈していた。

床面は、砂層で構成されているが安定し、ほぼ水平面を成す。覆土は、上位から中位には黄褐色粘土層（第3～第5層であり、灰褐色粘土粒及びマンガン粒の量、あるいは粒の大小によって区分されている）が主体となり、上下に帯状の黄褐色粘土をもつ灰色粘土層（第6層）が堆積している。なお第7層は、基盤層第10層とほとんど同一であり、床面を構成するものと思われる。

第3層と第4層の上位には、竪穴中央部に窪みがみられ、暗褐色粘土・灰褐色粘土混在層（第1層）、黒褐色粘土層（第2層）が堆積し、土師器坏（No.1～15）、土師器高坏（No.16）、



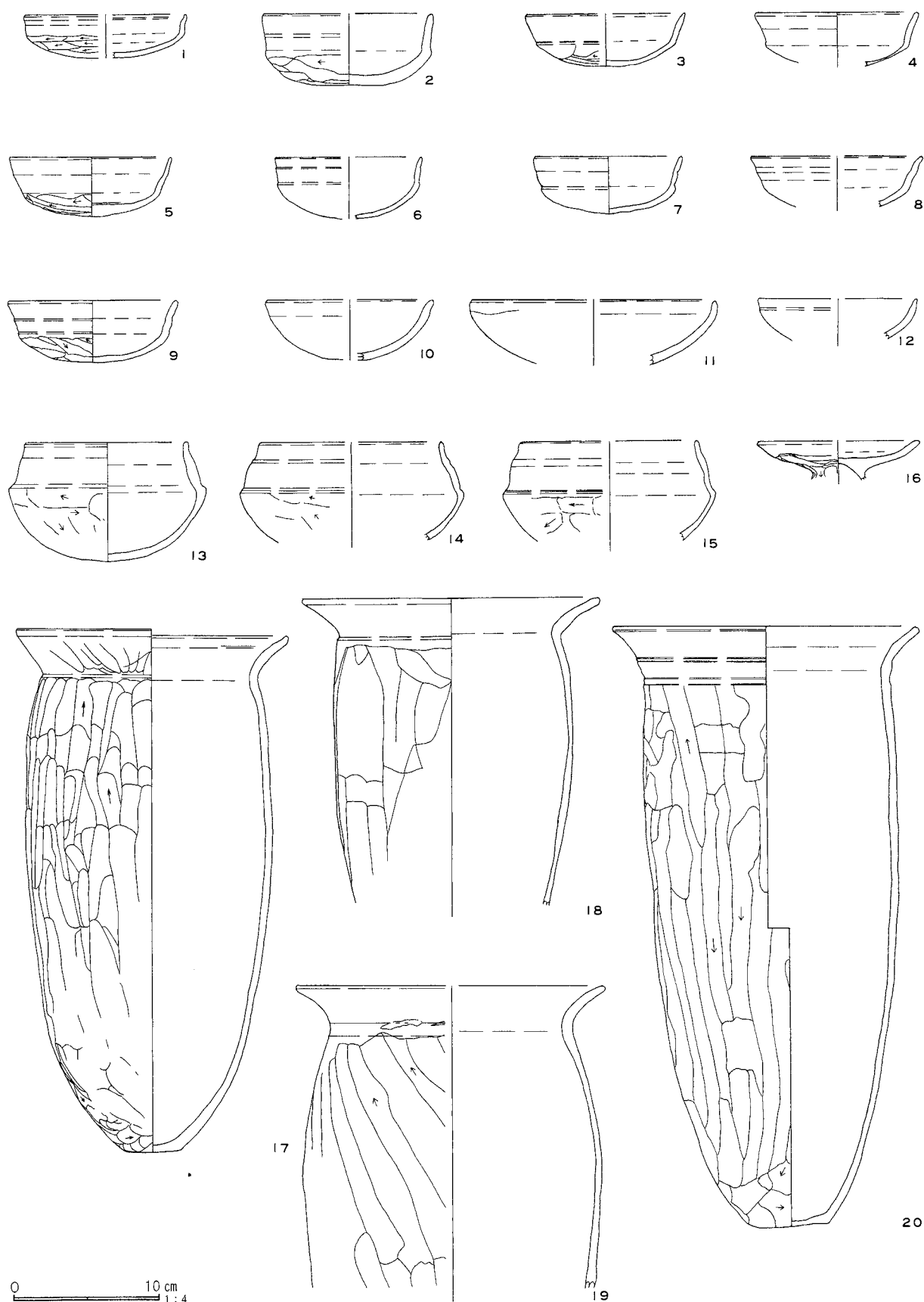
第17図 第4号住居跡



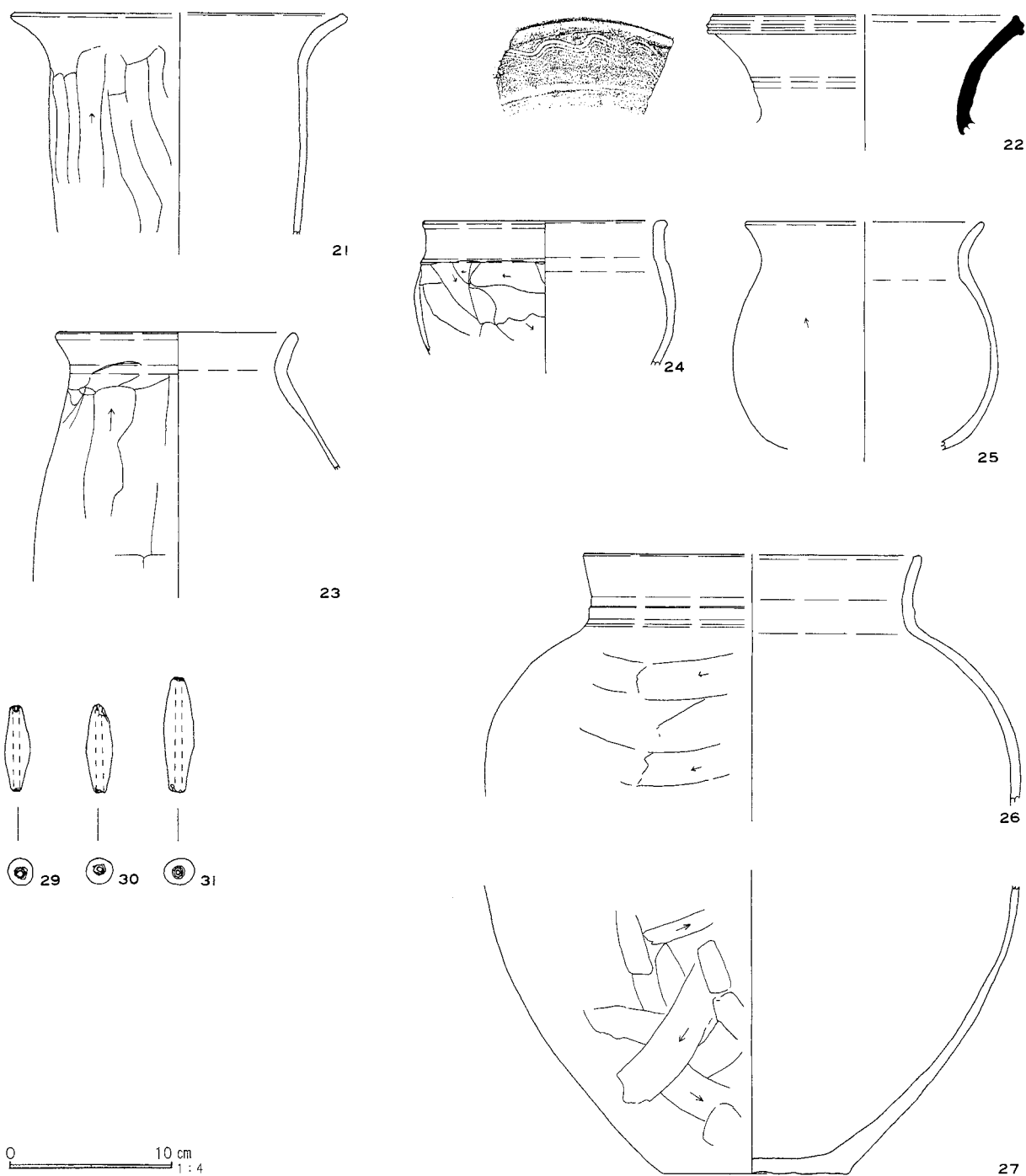
第18図 第4号住居跡カマド

第4表 第4号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・坏	(11.4)	—	—	BAJKN	B	明赤褐2.5YR5/6	1/4	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ。口縁部及び体部内面丹彩。内面吸炭。煤付着。
2	土師器・坏	(11.8)	5.0	5.8	IMAJN	B	赤褐4/6	3/5	口縁部横ナデ(2段)、内外面煤付着。体部外面ケズリ、底面ケズリ出し、丸底。内面ナデ。
3	土師器・坏	(11.3)	3.1	—	BEAN	B	にほんブログ村7.5YR7/4	1/3	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。内面一部吸炭。
4	土師器・坏	11.3	—	—	IAKBN	B	にほんブログ村5YR6/4	1/2	口縁部横ナデ(2段)、体部外面表面磨減(ケズリ痕)。内面ナデ。内面全面、外面口縁部炭化物(一部タール状)付着。
5	土師器・坏	11.3	4.2	—	BAKEN	B	橙5YR7/6	一部欠	口縁部横ナデ(2段)。体部外面ケズリ、内面ナデ。
6	土師器・坏	(10.2)	(4.8)	—	BAMJ	B	黄橙7.5YR7/8	2/5	表面磨減。口縁横ナデ痕(2段)。体部外面ケズリ痕。
7	土師器・坏	10.3	4.0	—	MCDA	B	明赤褐5YR5/6	一部欠	表面磨減。口縁横ナデ痕(2段)。体部外面ケズリ痕、内面一部吸炭。二次加熱。



第19図 第4号住居跡出土遺物①

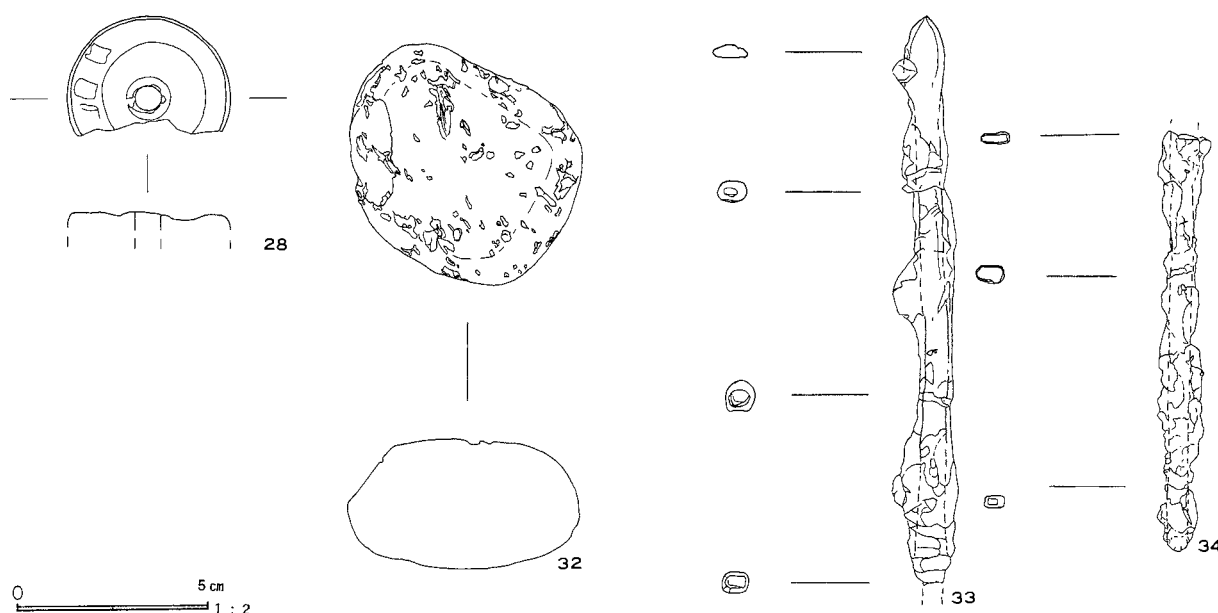


第20図 第4号住居跡出土遺物②

8	土師器・坏	(12.8)	—	—	KABEN	B	橙5YR7/6	1/5	口縁部横ナデ(2段)。体部外面ケズリ痕、内面ナデ。
9	土師器・坏	12.0	4.3	—	BCEAKJ	B	橙7.5YR6/6	2/3	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。内面全面、外面口縁部炭化物(一部タール状)付着。
10	土師器・坏	(11.6)	4.2	—	BAMIG	B	橙5YR6/8	1/6	表面磨減。体部外面ケズリ痕。
11	土師器・坏	(17.1)	—	—	AIBG	B	橙5YR6/8	1/9	表面磨減。体部外面ケズリ痕。
12	土師器・坏	(11.7)	—	—	BACKI	B	橙7.5YR7/6	口縁部1/3	表面磨減。二次加熱。
13	土師器・坏	11.2	8.3	—	BAKJNI	B	橙2.5YR6/6	4/5	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。口唇部内面から外面口縁部、体部上位にかけて炭化物(一部タール状)付着。
14	土師器・坏	(12.7)	—	—	BACIKN	B	明赤褐5YR5/6	1/4	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。内外面共吸炭、炭化物(一部タール状)付着。

15	土師器・坏	(12.3)	—	—	IKA	B	黒 N2/	1/4	口縁部横ナデ(2段)。体部外面ケズリ、内面ナデ。全面炭化物(一部タール状)付着。
16	土師器・高坏	(11.1)	—	—	BACJKN	B	橙5YR6/6	坏部1/3	口縁部横ナデ。体部脚部外面ケズリ、内面ナデ。ほぼ全面炭化物付着。二次加熱。
17	土師器・甕	19.0	36.4	4.0	MABGEKO	B	橙5YR7/6	4/5	口縁部横ナデの後外面ケズリ様ナデが加わる。口唇部矩形。胴部外面縦、底部周辺横のケズリ、底面ケズリ。内面ナデ1/2吸炭、上位1/2炭化物付着。二次加熱。
18	土師器・甕	20.4	—	—	MBANI	B	橙5YR6/8	胴下半部欠	表面剝離した部分が多い。口縁部横ナデ。胴部外面ケズリ。内面ナデ、吸炭。二次加熱。
19	土師器・甕	(21.4)	—	—	MAINJB	B	にぶい褐7.5YR5/4	上位1/3	口縁部横ナデ。胴部外面斜のケズリ、一部吸炭。内面ナデ。二次加熱。
20	土師器・甕	21.1	41.7	5.0	BACEINO	B	橙7.5YR7/6	一部欠	口縁部横ナデ(2段)、口唇部矩形。胴部外面縦、底部周辺一部横のケズリ、下位1/3煤付着、底面ケズリ。内面ナデ、下位2/3吸炭。二次加熱。
21	土師器・甕	(20.7)	—	—	ADMBCIN	B	灰黄褐10YR6/2	上位2/5	口縁部横ナデ、口唇部矩形。胴部外面縦のケズリ。内面ナデ。全面吸炭。
22	須恵器・甕	(19.1)	—	—	ALB	B	灰白 N6/	口縁部1/5	—
23	土師器・甕	14.9	—	—	IMNOA	B	にぶい黄橙10YR6/4	胴下半部欠	口縁部横ナデ。胴部外面縦のケズリ。内面ナデ。二次加熱。
24	土師器・甕	15.0	—	—	MACIOKN	B	にぶい橙7.5YR7/3	胴下半部欠	口縁部横ナデ。胴部外面、肩横、他縦のケズリ。内面ナデ。
25	土師器・甕	(14.8)	—	—	BMADN	B	橙7.5YR7/6	1/5	内外面共表面剝離、口縁部一部吸炭。二次加熱。
26	土師器・甕	(21.2)	—	—	ACGBN	B	にぶい黄橙10YR7/3	上位1/3	口縁部横ナデ。胴部外面横のケズリ。内面ナデ。全面吸炭。
27	土師器・甕	—	—	11.6	BAMD	B	浅黄橙7.5YR8/4	下位2/3	外面斜のケズリ、内面ナデ、底面ナデ。内面吸炭、一部炭化物付着。外面吸炭、一部煤付着。二次加熱。
28	石製紡錘車	径4.3 孔径0.7 厚さ— 重さ 残13.5g							3/4
29	土錘	長さ5.3 径1.6 孔径0.4 重さ10.6g							ほぼ完形
30	土錘	長さ5.6 径1.7 孔径0.4 重さ10.9g							ほぼ完形
31	土錘	長さ7.2 径1.9 孔径0.4 重さ20.4g							ほぼ完形
32	砥石	長さ6.4 幅6.1 厚さ3.4 重さ60.8g							— 小口面使用1.9×3.0cm。軽石製。
33	鉄鏃	—							—
34	鉄鏃	—							—

須恵器甕(No.22)、土師器甕(No.21、23～27)、砥石(No.32)、石製紡錘車(No.28)、鉄鏃(No.33・34)、土錘(No.29～31)等が破片状で集中して出土している。



第21図 第4号住居跡出土遺物③

第5号住居跡 調査区南東部の12・17グリッドに位置している。北側で第3号住居跡を削平し、南側で(第22図) は第7号住居跡の外縁部を切断している。

(第23図) 北西辺が3.40m、北東辺が3.40m、南東辺が4.02m、南西辺が3.58mを計る。各隅が丸

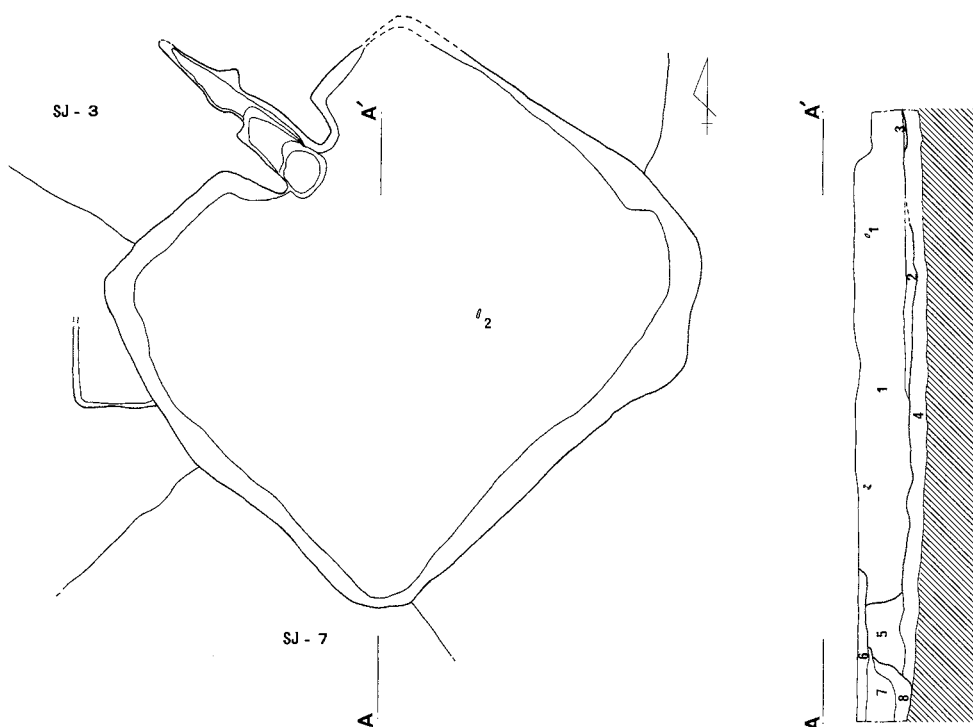
(第24図) みをもち、南東辺のみやや長い台形を呈すると思われる。主軸方位はN-45°-Wを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、全体的に崩落した部分が多い。

カマドは、台形上辺にあたる北西辺のほぼ中央に設置されている。燃焼部は、全て竪穴内に位置せず、僅かに燃焼奥部が壁ライン外にはみ出しているものと思われる。また前面は、両袖前面より床面上に張り出している。燃焼部の長さ78cm、前面幅35cm、奥面幅30cmを計り、隅がやや丸みをもつものの、長方形を呈するといえる。燃焼部の最も残状況の良い部分(第23図C-C'ライン)では、壁がほぼ垂直を成し、両壁共激しく焼土化している。天井部までの高さは26cmであったことを示している。火床は、前部に幅・奥行き共に33cm前後で床面からの深さ5cmの窪みをもち(右袖側のみ奥行きが深く43cmを計る)、奥に向けて徐々に浅くなっていく。燃焼部の奥面は、壁の形状を成さず、火床からの緩い傾斜で煙

道部へと連続している。煙道部は、右袖側に設けられ、中ほどまで火床からの緩傾斜が連続するが、その後、奥に向けて徐々に上昇して幅も狭め、奥壁に至ってほぼ垂直に立ち上がり、煙出し部を形成している。煙道部の長さは90cm前後を計る。

覆土は、多量のマンガン粒を含む黄褐色粘土ブロックと灰褐色粘土ブロックの混在層(第1層)である。



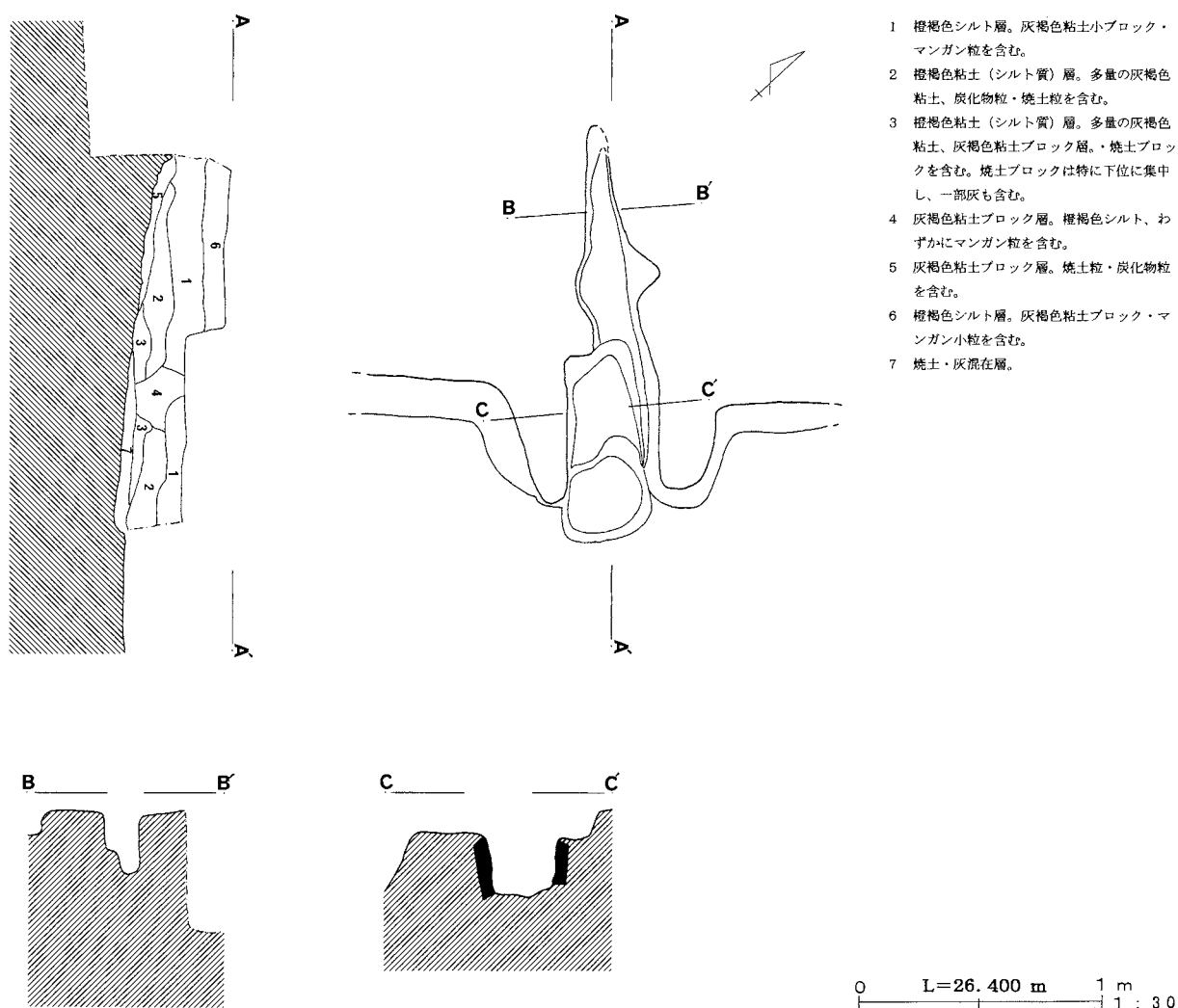
- 1 黄褐色粘土ブロック・灰褐色粘土ブロック混在層。多量のマンガン粒を含む。
- 2 黄褐色粘土ブロック・灰褐色粘土ブロック混在層。多量のマンガン粒・灰を含む。
- 3 純灰層。
- 4 灰色砂層。黄褐色粘土ブロックを含む。
- 5 灰色シルト層。わずかに黄褐色粘土ブロックを含む。
- 6 黄褐色粘土層。灰色粘土ブロックを含む。(SJ-7覆土)
- 7 灰色シルト層。黄褐色粘土ブロック・マンガン粒を含む。(SJ-7覆土)
- 8 灰色シルト層。黄褐色粘土ブロック・マンガン粒・焼土粒を含む。(SJ-7覆土)

0 L=26.500 m 2m 1:60

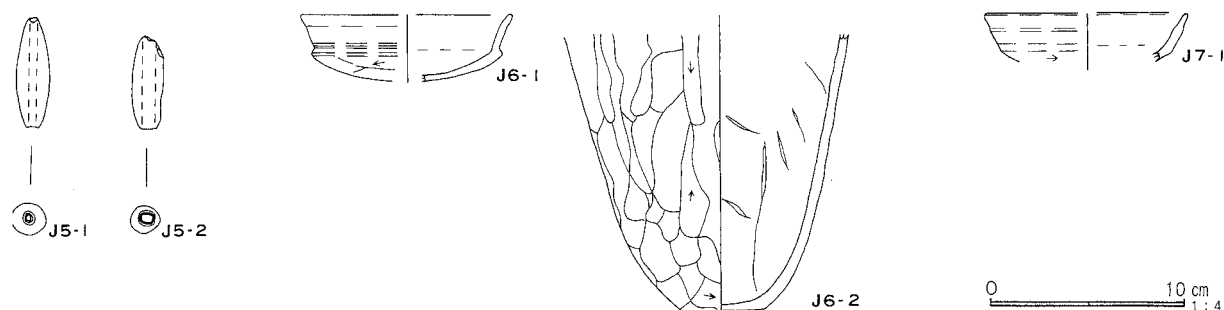
第22図 第5号住居跡

第5表 第5号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1.	土鍾	長さ5.8	径1.8	孔径0.6	重さ16.3g			完形	
2.	土鍾	長さ4.9	径1.6	孔径0.7	重さ9.4g			一部欠	



第23図 第5号住居跡カマド



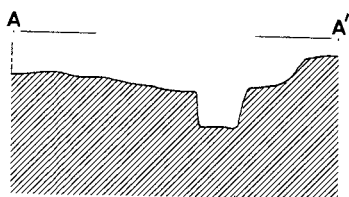
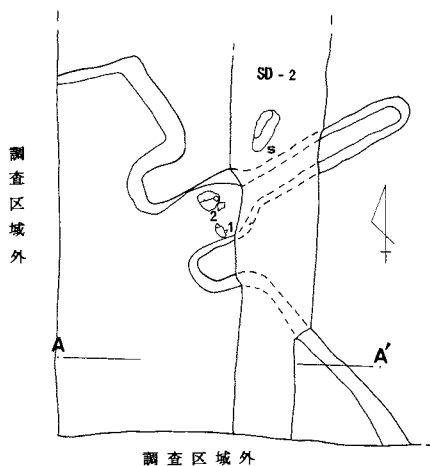
第24図 第5号・第6号・第7号住居跡出土遺物

第6表 第6号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・坏	(11.2)	—	—	AICMBJN	B	橙5YR7/6	1/6	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ。内面ナデ、一部吸炭。
2	土師器・甕	—	—	4.3	ABIMEN	B	灰褐5YR6/2	1/3	外面縦、底部周辺横のケズリ、底面ナデ。1/2吸炭。内面ヘラによる斜のナデ、全面吸炭。二次加熱。

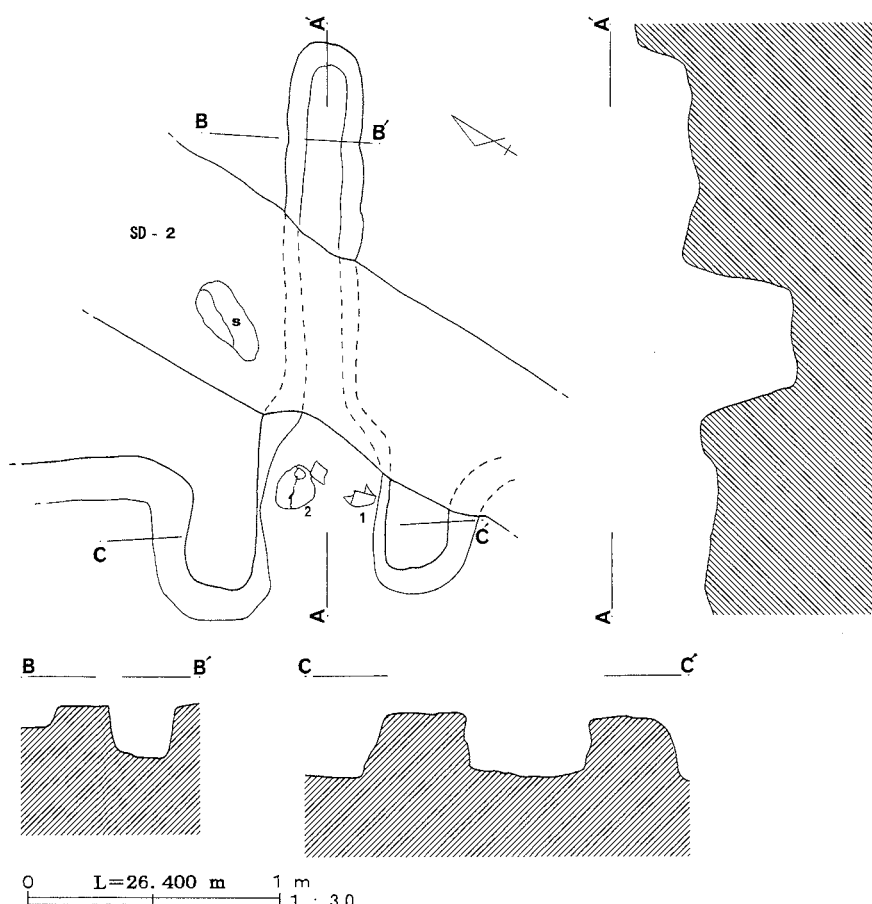
第7表 第7号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・坏	(10.6)	—	—	AEGBN	B	明赤褐2.5YR5/8	口縁部1/5	口縁部横ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。



0 L=26.400 m 2m 1:60

第25図 第6号住居跡



第26図 第6号住居跡カマド

またカマドの前面には灰層（第3層）が広がり、中央部の床面上には第1層と第3層の混在層（第2層）が広がっている。

遺物が極端に少なく、2点の土錘の他は、土師器小片がわずかに検出されたのみである。

第6号住居跡（第25図）（第26図）（第24図）

調査区南西隅の19・20・24グリッドに位置している。上面には第1号溝跡が位置し、カマド煙道部及び竪穴北東辺の一部は第2号溝跡によって切断されている。また、大部分が調査区域外に位置し、北西及び北東辺の一部が確認されたにすぎない。

このため、規模・形状ともに不明であるといわざるを得ないが、北西辺から北東辺へ移行する北隅がほぼ直角を成すことから、方形を呈するものであろう。主軸方位はN-51°-Eを示す。壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、全体的に崩落した部分が多い。

カマドは、北東辺北隅寄りに設置されている。燃焼部は、全て竪穴内に位置せず、僅かに燃焼奥部が壁ライン外にはみ出しているものと思われる。また前面は、両袖前面にラインから奥に向けて緩やかに窪みをもつ。燃焼部は奥部が第2号溝跡に

よって切断されているため、長さは不詳であるが、左袖奥部の状況から約90cmを計るものと考えられ、前面・奥面共に幅50cm、を計ることから、ほぼ長方形を呈するといえよう。土師器甕（No.2）が検出されている。煙道奥部床面は、凹凸を成し、奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。煙道部は幅がほぼ30cmで推移し、長さ140cmに及ぶと思われる。煙出し部は円形を呈する。

覆土は、多量のマンガン粒を含む黄褐色粘土と灰褐色粘土の混在層であり、シルト質である。覆

土中より土師器坏 (No. 1・一部カマド内) が出土している。

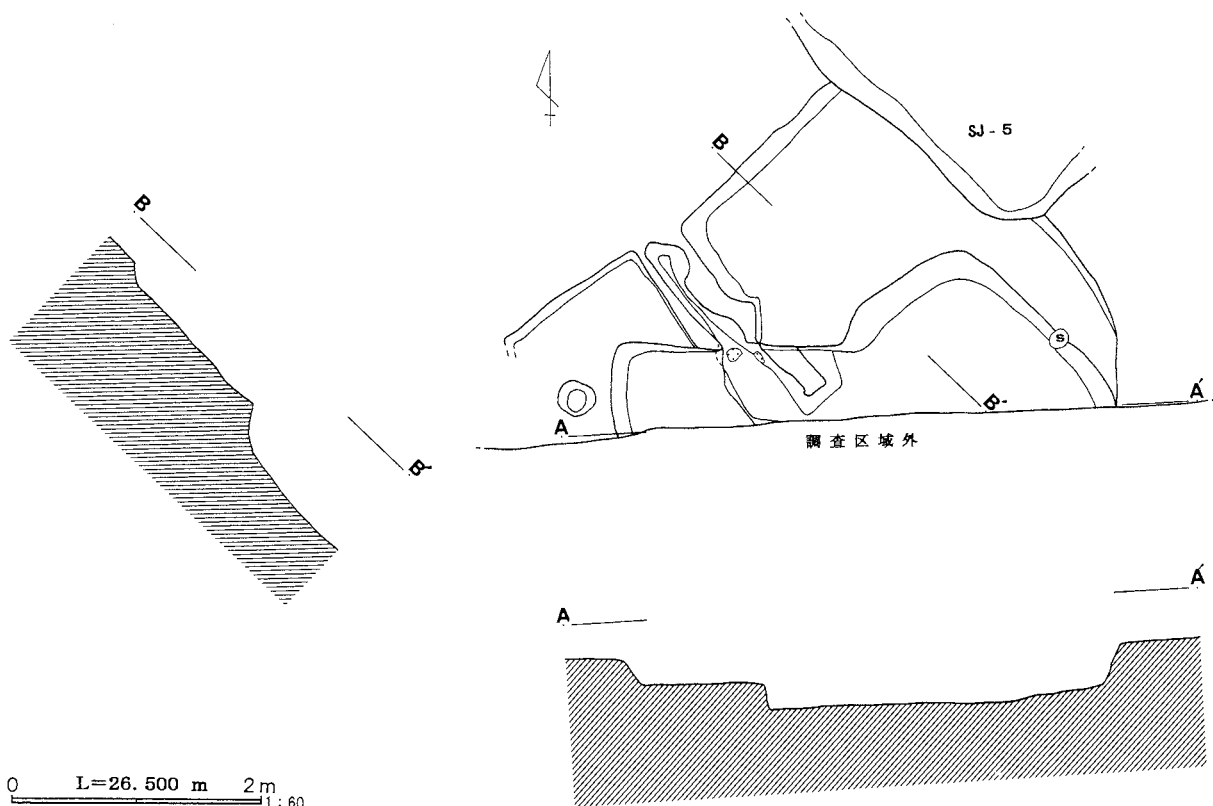
第7号住居跡 調査区南端部の17・18・22・23グリッドに位置している。北隅上段を第5号住居跡に切
(第27図) 断されている。また大部分は南側調査区域外に位置している。

(第28図) このため、規模・形状ともに不明であるといわざるを得ないが、北西辺から北東辺へ移

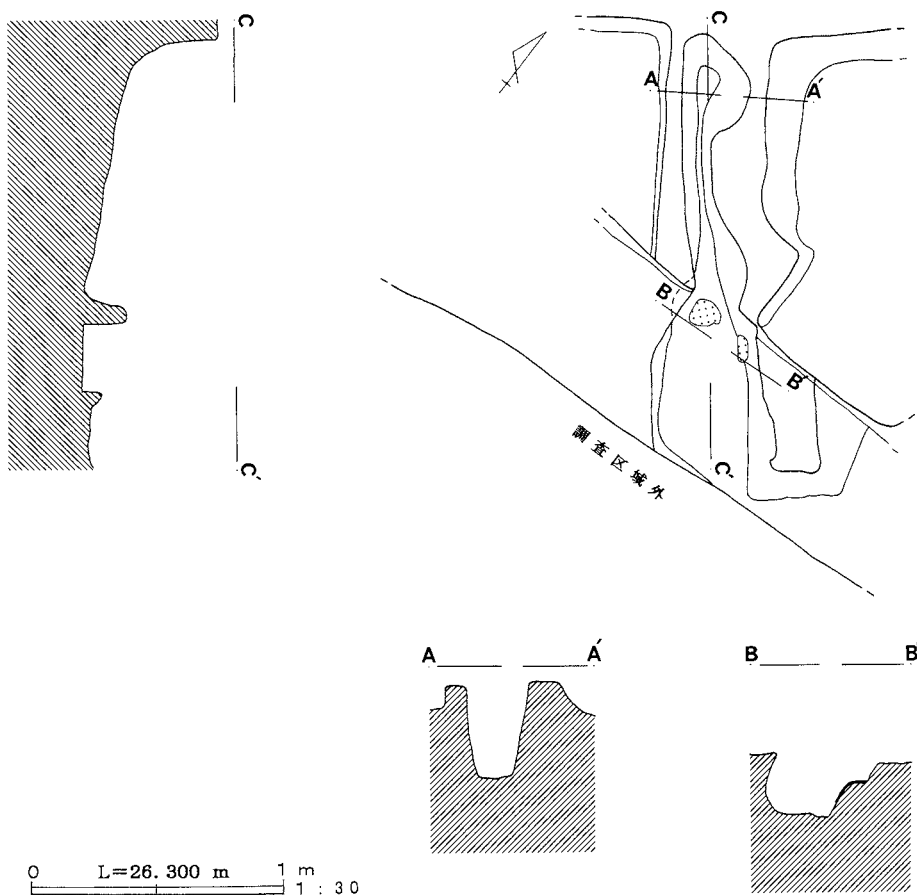
(第24図) 行する北隅、南西辺から北西辺へ移行する西隅は、それぞれがやや丸みをもつものの、ほぼ直角を成している。しかし北西辺は、カマドの東側部分で屈曲しているため、方形を呈するとはいえず、不整形であるといわざるを得ない。主軸方位は $N-42^{\circ}-W$ を示すが、カマド左側の北西辺西半分と南西辺の作り出す方位は $N-0^{\circ}-W$ を示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、全体的に崩落した部分は少ない。床面から30cm上位では、北西辺側幅150cm、北東辺側幅60cmの外縁部上段をもち、その高さは20cm前後を計る。北西辺側の外縁部上段は、カマド煙道部を保護するように、煙道部を挟んで左7～15cm、右8～20cmの幅で断ち切られる。

カマドは、北西辺西隅寄りに設置されている。残存状況は悪く、左袖は失われている。燃焼部は、全て竪穴内に位置する。詳細は不明であるが、幅40～45cm、長さ80cmで奥部は丸みをもって狭まってくるが、基本的には長方形を呈すると思われる。奥部中央、右袖部、前面中央に床からかなり浮いた状況で焼土が検出されている(第28図C-C'ライン上、調査時床面との分離が不可能と判断され残されたもの)が、本来は天井部の崩落したものであろう。火床はほぼ水平面を成し、奥部で壁を作らずに直線的に上昇して煙道部となる。直線的に上昇した煙道部は、奥部に至って丸みをもち、垂直の壁を成している。煙道部の



第27図 第7号住居跡



第28図 第7号住居跡カマド

長さは100cmを計る。

覆土(第22図参照)は、黄褐色粘土ブロック及びマンガン粒を含む灰色シルト層であり、焼土粒を含む場合(下位層・第8層)と含まない場合(上位層・第7層)に区分される。また最上位・外縁部上段部には、灰色粘土ブロックを含む黄褐色粘土層(第6層)が堆積している。

遺物の出土量が少なく、僅かに土師器坏(Na.1)が見られたのみである。

2 掘立柱建物跡

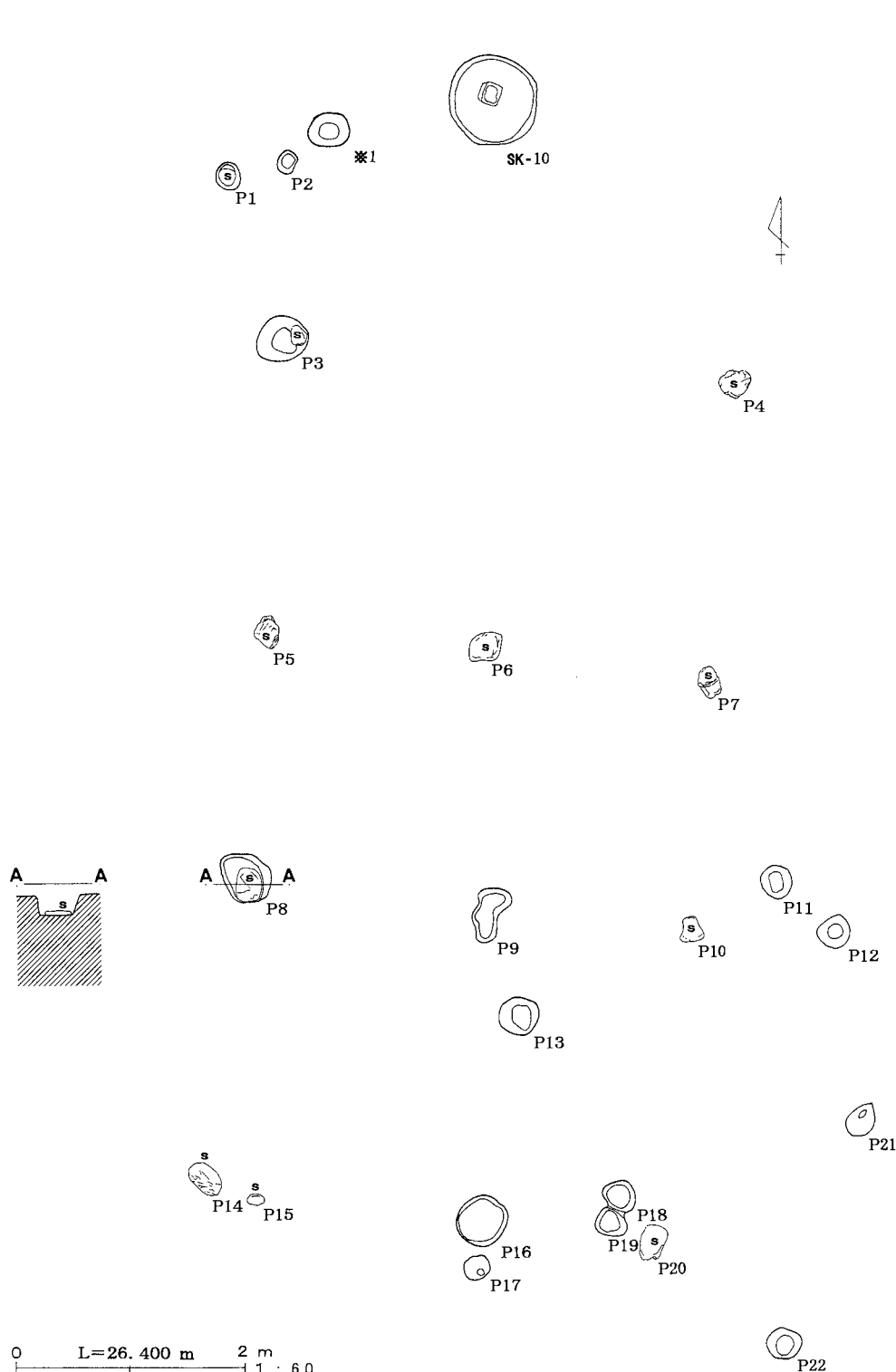
第1号掘立柱建物跡 調査区南部中央の13・14・18・19グリッドに位置している。第1号竪穴状遺構、(第29図) 第3号住居跡、第4号住居跡それぞれの覆土上面から掘り込まれている。南側調査区域外(第30図)に遺構が延伸しているかどうかは、確認されていない。本遺構は、P1・3・8においてピット底面に礫が敷かれた状況が確認されたことを基に、これらと同一覆土である黄褐色粘土ブロック・マンガン粒を含む灰褐色粘土層とするピット(10例、P11、12、13、21を除く)、平坦面を上下に敷いた状況の礫のみの出土(8例)から成る。また、第1号竪穴状遺構南端中央部上のピット(*1)及び第10号土坑も同一覆土であることから、本遺構を構成している可能性が高い。しかしながら、第10号土坑のみ径78×82cm、深さ27cmと規模が飛び抜けて大きいため、一応独立した土坑として扱ったものである。

ピットは、円形を呈するP3が径28×32cm、深さ14cm、不整円形を呈するP8が径30×35cm、深さ12cmを計る。また上面から検出された*1ピットは、径32×35cm、深さ37cmを計る。いずれも底面は水平であり、壁はほぼ直立する。円形を呈するP16は、径34×32cm、深さ6cmを計る。

各ピット(礫のみの場合を含む)の南北芯々間距離は、西側列が(*1-P4・1.90m) P3-P5・2.62m、P5-P8・2.20m、P8-P14・2.65m、東側列がP4-P7・2.65

各P形状・底高・規模〈底高は、標高を示す〉

P 1.円、礫敷26.17m 径22×28cm、深15cm P 2.方円、26.14m 径15×19cm、深18cm P 3.円、礫敷26.27m P 4.礫敷26.17m P 5.礫敷26.30m P 6.礫敷26.40m P 7.礫敷26.18m P 8.円、礫敷26.18m P 9.不整、26.30m 径50×29cm、深8cm P 10.礫敷26.33m P 14.礫敷26.38m P 15.礫敷26.40m P 16.円、26.42m P 17.円、26.40m 径22×25cm、深8cm P 18.円、26.32m 径30×25cm、深15cm P 19.円、26.30m 径24×28cm、深18cm P 20.礫敷26.36m P 22.円、26.33m 径14×15cm、深18cm * 1.円、26.12m P 11.円、27×30×6cm P 12.円、26×29×15cm P 13.円、36×36×21cm P 21.円、24×35×10cm

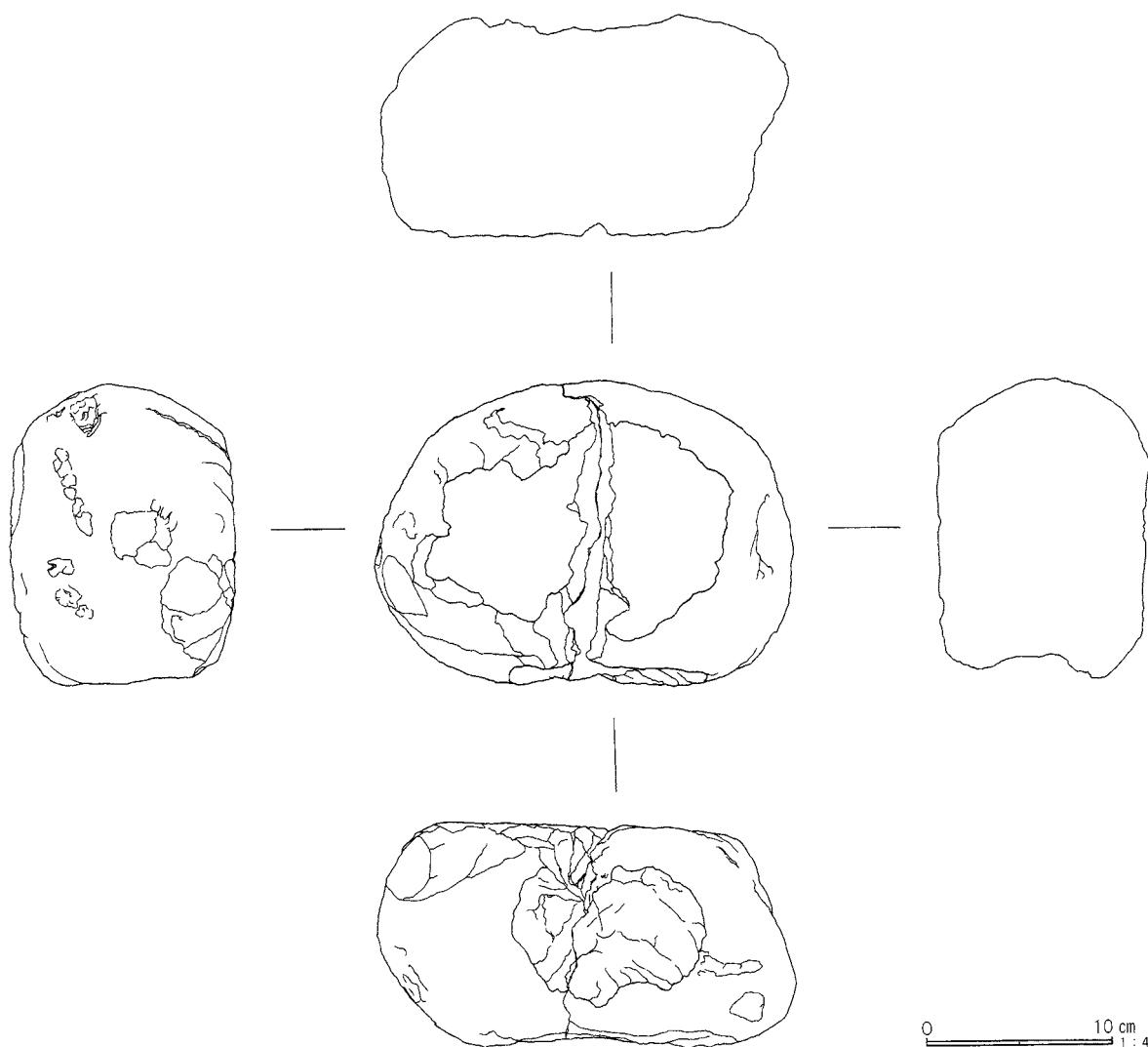


第29図 第1号掘立柱建物跡

m、P 7 - P 10・2.22m、P 10 - P 20・2.75 mを計る。P 3 - P 5 と P 4 - P 7、P 5 - P 8 と P 7 - P 10、P 8 - P 14と P 10 - P 20の、南北方向に列を成すそれぞれのピットの間隔・狭長は同一である。さらに中間柱列の南北芯々間距離は、P 6 - P 9・2.26 m、P 9 - P 16・2.76mを計り、外列と軌を一にしている。また、P 3 - 5 - 8 - 14、P 4 - 7 - 10 - 20それぞれのラインは、ほぼ併行してN-5°-Eを示す。しかしながら、いずれも南端のピッ

ト、西側列ではP14、東側列ではP20がラインから西にずれる特色を示している。一方、東西列はそれぞれが直線上に配され、芯々間距離は、(P3-P4・4.00m)、P5-P6・1.95m、P6-P7・1.90m (P5-P7・3.85m)、P8-P9・2.15m、P9-P10・1.80m (P8-P10・3.95m)、P14-P16・2.45m、P16-P20・1.50m (P14-P20・3.95m)を計る。P6-P9-P16の中間列は、外列と僅かに方位を違え、N-1°-Eを示す。なお、第10号土坑は、このライン上に位置し、P6との芯々間距離は、4.90mを計る。ちなみに、*1-P5間は3.52mであるため、*1から東へ伸びるラインが存在した場合には、第10号土坑は外に大きくはみ出す格好となる。

支柱石として使用されている礫は、大部分が20×30cm程の長円形もしくは隅円方形を呈する自然礫で、厚さは8～10cm程である。このうちP7のみ角閃石安山岩が使用されている。22.3×16.5cm大の円礫を、上下に平坦面を削り出して、厚さ12cmに整えている。また側面のうち一面を削っている(都合三面加工)。恐らく近在する古墳の石室に使用された礫を再利用したものと思われる。



第30図 第1号掘立柱建物跡加工石

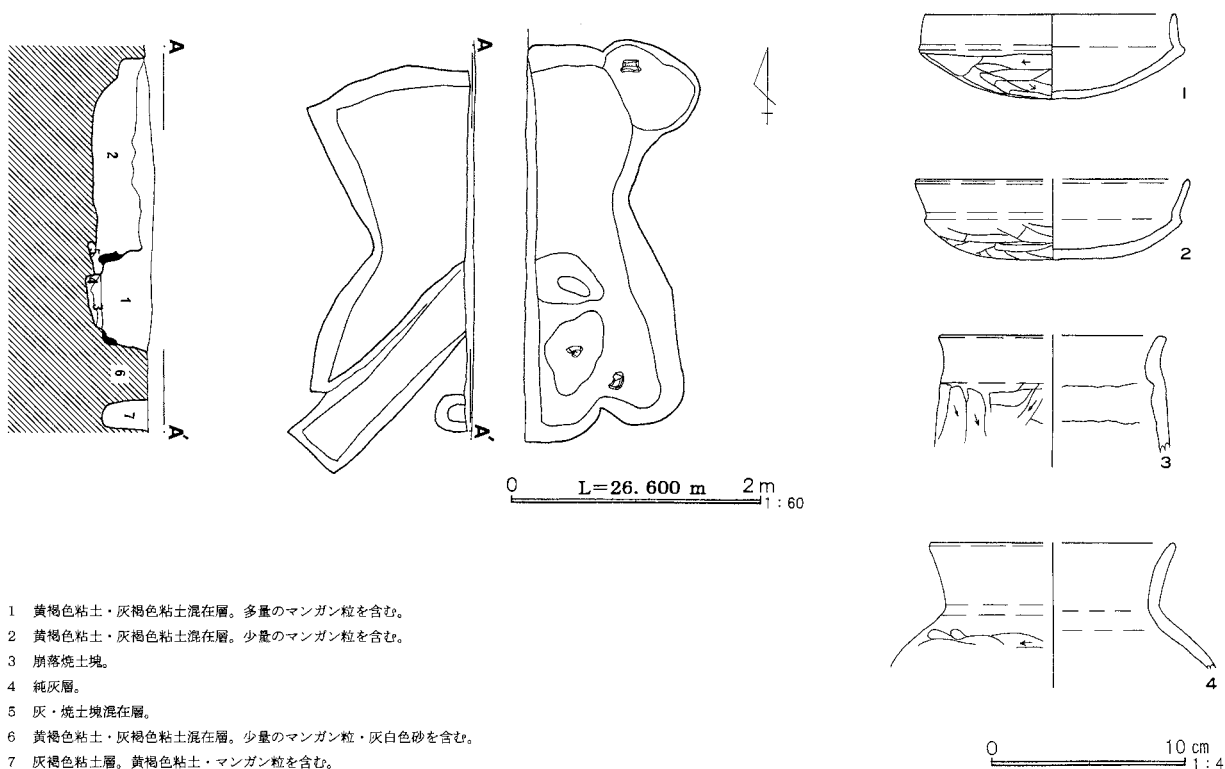
3 竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構 調査区南部中央の8・9グリッドに位置している。中央部から南西隅にわたって第9号土坑によって切断され、南側上面には、第1号掘立柱建物跡を構成するピット(*1)や第10号土坑が位置している。

壁が屈曲していて実数値は計測しがたいが、東西2.06～2.98m、南北2.10～3.22mの規模で、不整形ではあるが、基本的には矩形を呈するものと思われる。基本的な主軸方位はN-2°-Wを示す。

床面は凹凸を成し、安定しない。南東隅には床からの深さ25cm程のピットが二つ穿たれている。壁はほぼ垂直であるが、床際はU字形を呈している。北東隅は、70×85cm、深さ8cm前後の張り出しが見られる。覆土は、少量のマンガン粒を含む黄褐色粘土と灰褐色粘土の混在層である。

遺物は南東隅部から土師器坏(Na.1、2)、甕(Na.3)、北東張り出し部から土師器甕(Na.4)が出土している。



第31図 第1号竪穴状遺構・出土遺物、第9号土坑

第8表 第1号竪穴状遺構出土遺物観察表

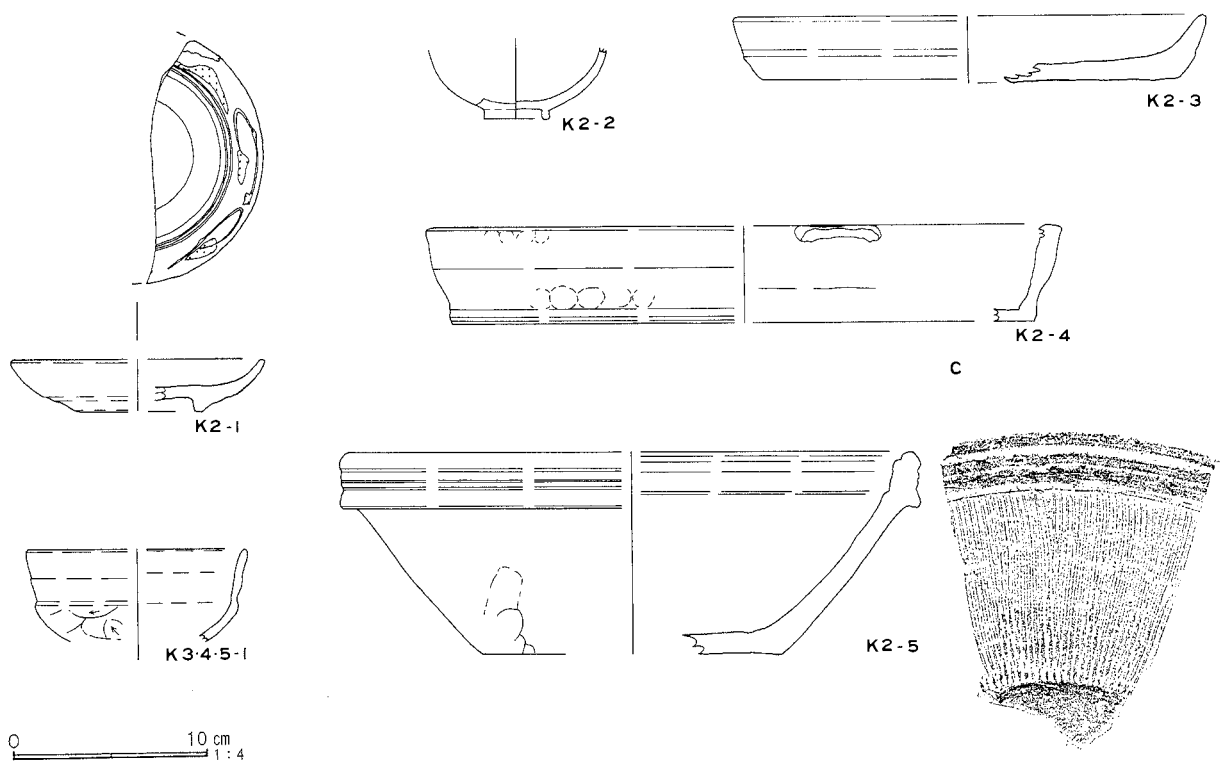
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・坏	13.2	4.5	—	ADHIM	B	にぶい橙7.5YR6/4	3/5	口縁部横ナデ、一部両面にまたがって炭化物付着。体部外面ケズリ、内面ナデ。内外面の一部吸炭。
2	土師器・坏	(14.5)	4.2	—	BACKGJM	B	橙5YR6/8	2/5	口縁部横ナデ(一部2段)。体部外面ケズリ、内面ナデ。内外面共吸炭(黒色化?)。
3	土師器・甕	(11.4)	—	—	NOIM	C	灰黄褐10YR6/2	口縁部1/4	口縁部横ナデ及び横のナデ。胴部外面斜のケズリ、一部ナデが加わる。内面ナデ、輪積痕を残す。吸炭。二次加熱。
4	土師器・甕	(12.7)	—	—	AMIJN	A	橙5YR6/6	口縁部1/3	口縁部横ナデ。胴部外面横のケズリ、内面ナデ。

は、多量のマンガン粒を含む黄褐色粘土と灰褐色粘土の混在層（同第1層）である。遺物はまったく出土していない。

第10号土坑 調査区中央部の8グリッドに位置している。下位に第1号竪穴状遺構が位置している。

（第32図） 径78×80cm、深さ23cmを計る。

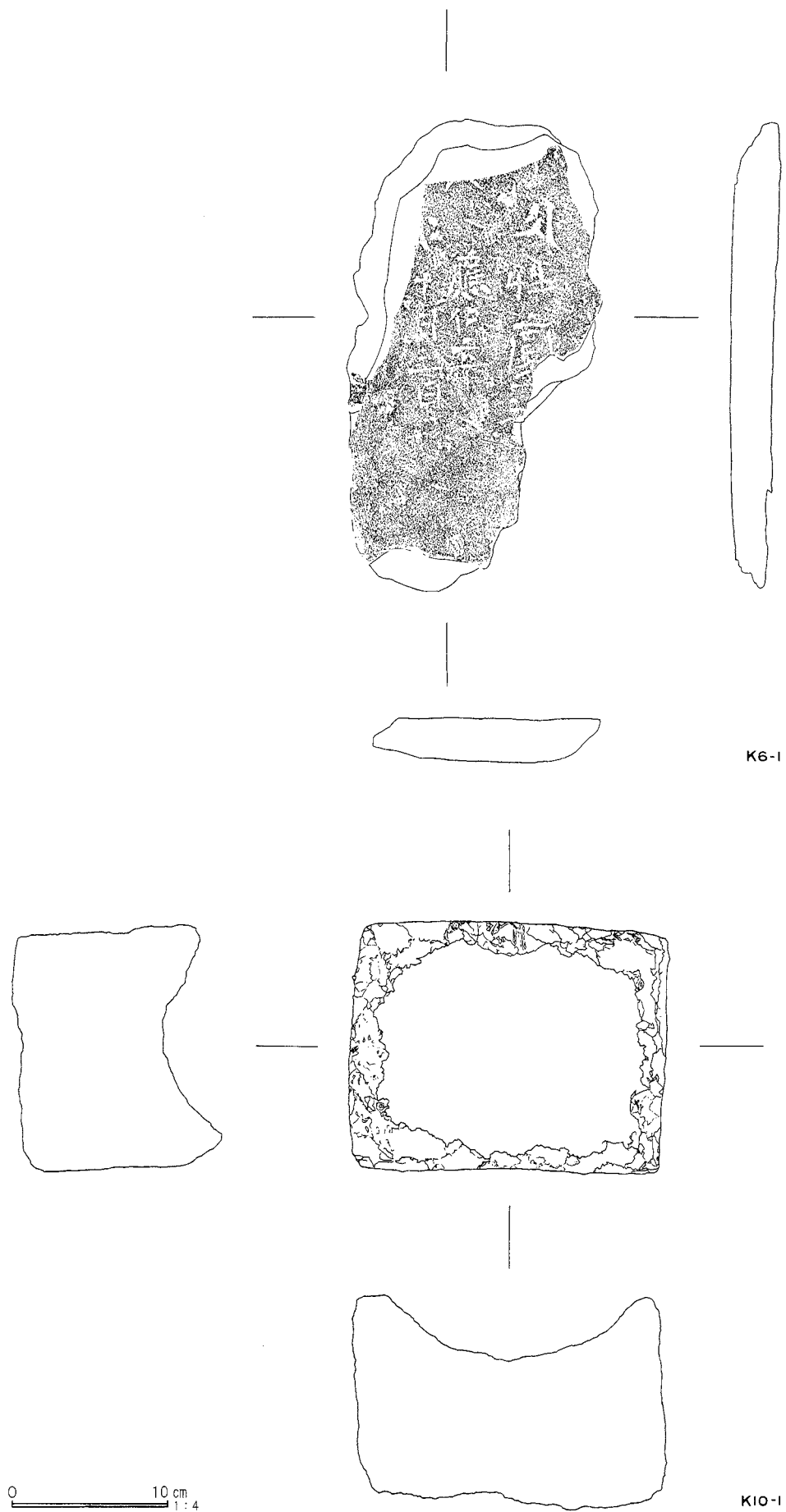
（第34図） 底面はほぼ水平を成し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面中央には、20.4×16.0×13.0cm大の角閃石安山岩が置かれている。角閃石安山岩は前面削られ、さらに上面中央には16.6×12.0cm隅円長方形の孔が穿たれている。孔の底面は半球形を呈する。石造物の一角を成す加工石が用いられたものと思われる。覆土は、多量の黄褐色粘土ブロック及びマンガン粒を含む灰褐色粘土層であり、下位ほどマンガン粒は多い。形状・覆土の共通性から、第1号掘立柱建物跡を構成するピットである可能性が高い。しかし規模が大きいこと、位置が多少ずれることから、一応単独の土坑として扱ったものである。



第33図 土坑出土遺物①

第9表 土坑出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
2-1	磁器・皿	(13.5)	2.3	(6.8)	—	B	灰白2.5GY7/	2/3	
2-2	灰釉陶器・椀	—	—	3.5	—	A	灰白5GY8/1	下位のみ	
2-3	焙烙	25.2	3.5	22.0	BACJKIN	A	明赤褐5YR4/8	1/4	
2-4	焙烙	(33.8)	5.1	(31.0)	EBAI	B	黒 N2/	1/12	
2-5	常滑・擂鉢	(30.0)	10.6	(15.8)	AIBCEN	A	暗赤褐10R3/3	1/5	
3・4・5-1	土師器・坏	(11.4)	—	—	ABKEN	B	明赤褐5YR5/6	1/6	口縁部横ナデ(2段)。体部外面ケズリ、内面ナデ。ほぼ全面吸炭。
6-1	板碑	長さ30.0 最大幅15.4 厚さ2.9						—	阿弥陀三尊板碑。緑泥片岩製、身部の一部残存。主尊：阿弥陀如来(種子部欠、蓮座のみ)。脇侍：観音、勢至両菩薩(種子のみ、蓮座無し)。供養者名：〇〇〇 干支：應仁元(六か) 丁(1467年) 十月二日
10-1	加工石	長さ20.0 幅16.0 厚さ14.0						—	角閃石安山岩製。



第34図 土坑出土遺物②

V ま と め

古墳時代後期 本調査の結果、古墳時代後期に属する遺構は、住居跡7軒(第1～第7号)、竪穴状遺構1基(第1号)、土坑5基(第3・4・5・7・9号)、性格不明遺構1基(第2号)である。中心は7世紀代であるが、第2号不明遺構出土の須恵器礎(上下段に長方形透かし・櫛描の波状文をもち、段部に凸横線が配される)等の出土によって、開始時期は5世紀末から6世紀初めに遡る可能性が高くなっている。

壁上位張出 第2・3・4・7号の各住居跡の壁上位には、幅50cm程の平坦面(第7号住居跡では150cmに及ぶ)が張り出しが確認されている。特色として、①竪穴全体に及ぶものではない点、②総じて床面よりおよそ30cmほど上位に設けられる点、③第7号住居跡にみられるように、カマド煙道部の上面では途切れる点、等々があげられる。竪穴住居の構造を知る上で、貴重な資料となろう。

カマド 第1号を除く6軒の住居跡には、カマドの設置があった。その設置位置は、北西辺例4軒(第2・4・5・7号)、北東辺例2軒(第3・6号)の二通りがみられ、時期の差によって設置位置が決定付けられている。このうち重複関係をみると、重複した第2・3・5号各住居跡では、北東辺カマドの第3号住居跡は、北西辺カマドの第2号・5号両住居跡によって切断されている。このことから、北西辺カマド例の住居跡の方が、北東辺カマド例の住居跡より新しいとみることができ、各住居跡出土の土師器のもつ時期差とも一致する結果となっているものである。

また、第2・4号各住居跡のカマド前に土師器甕形土器が、入子状に並べられ、カマド前を塞ぐ状況を作り出していたことが確認されている。第2号住居跡では、カマドに向かって左から、底部を西にして口縁を右袖前面に向け(Na12)、中央の甕はこれと入子状となりながらカマド主軸と直交するように配され(Na1 I)、一番右はこれと入子状となりながらも底部を左袖前面に向けて(Na15)配されており、全体で円を描く状況となっている。さらに中央部前面には扁平円礫上に土師器坏が配されている。入子状を呈することから、当初から甕形土器を寝せて配したことは明らかであり、カマド前を塞ぐ状況であることから、カマド閉塞に伴う儀式が想定される。同様な状況は第4号住居跡にも確認することができる。ただし第4号の場合は、土師器甕形土器の向きが逆であり、他の遺物も検出されていない。

中世の遺構 中世に属する遺構は、掘立柱建物跡1棟(第1号)、土坑2基(第6・第10号)、溝跡1条(第2号)である。第1号掘立柱建物跡は、南端が調査区域外に及ぶため確実ではないが、南北ラインがP3-5-8-14、P6-9-16、P4-7-10-20の3ラインで結ばれる南北3間、東西2間の建物跡であった可能性が高い。また、北側の*1ピットや第10号土坑、P15・17・18・19・22各ピットの存在、方位がほぼ共通する第2号溝跡を含めて検討を重ねなくてはならない。さらに、これらの遺構の存在した時期が、第6号土坑から出土した板碑の年代(応仁)とどのような関連するかの検討も重要であろう。

写真図版



遺跡全景（北東より）



遺跡全景（南西より）



調査区全景(北より)



調査区全景(南より)



第1号住居跡全景



第1号住居跡遺物出土状況①



第1号住居跡遺物出土状況②



第2号住居跡検出状況



第2号住居跡全景



第2号住居跡カマド



第2号住居跡遺物出土状況①・竪穴北部



第2号住居跡遺物出土状況②・カマド周辺



第2号住居跡遺物出土状況③・竪穴南部

第3号住居跡全景



第3号住居跡カマド



第3号住居跡遺物出土状況・竪穴東部





第4号住居跡全景



第4号住居跡カマド



第4号住居跡遺物出土状況①・カマド周辺

第4号住居跡遺物出土状況②・覆土中



第5号住居跡全景



第6号住居跡全景

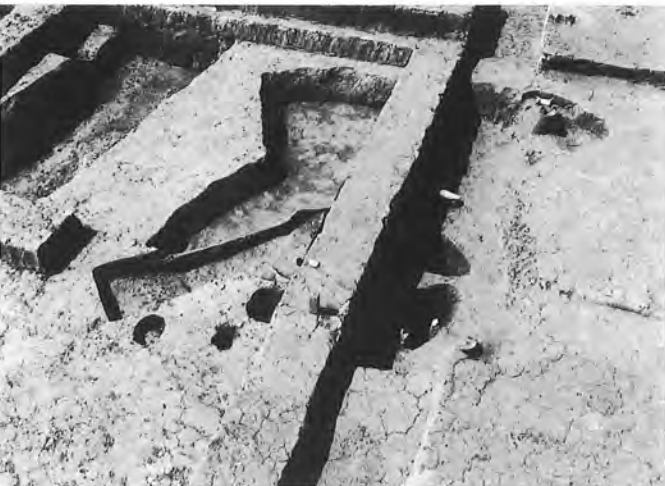




第7号住居跡全景



第1号掘立柱建物跡全景



第1号竪穴跡全景

第1号・第2号溝跡全景



第1号土坑



第2号土坑





第3号土坑



第4号·第5号土坑



第6号土坑找出状况

第6号土坑板碑検出状況



第6号土坑



第7号土坑





第8号土坑



第9号土坑



第10号土坑

图版14 第1号・第2号住居跡出土遺物



1-1



2-2



1-2



2-3



1-3



2-4



2-1



2-8



2-9



2-10



2-12



2-11



2-13



2-14



2-15



2-16



2-17



2-18



2-19



2-20



2-21



2-22



2-23



3-8



2-24



3-3



3-5



3-7



3-10



3-16



3-12



3-17



3-14



4-4



4-5



4-7



4-9



4-17



4-20



4-13



4-28



4-32



6-2



4-33



4-34



各住居跡出土土錘左より1-14、2-25・26、
3-18・19、4-29・30・31、5-1・2

図版22 その他の遺物



ST1-1



SK10-1



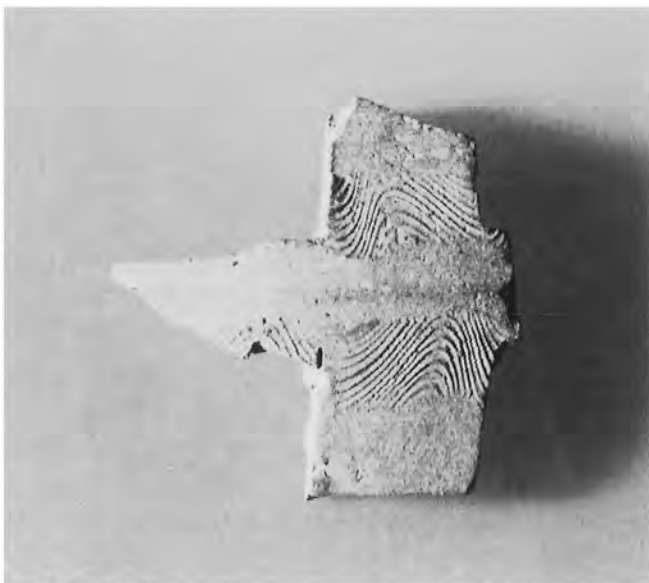
SX1-3



SB1-1



SK6-1



SX2-5

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ひがしうらいせき							
書 名	東浦遺跡							
副 書 名	熊谷市東浦遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書							
巻 次								
シ リ ー ズ 名								
シ リ ー ズ 番 号								
編 集 者 名	寺社下 博							
編 集 機 関	熊谷市東浦遺跡調査会							
所 在 地	〒360-8601 埼玉県熊谷市宮町二丁目47番地 1 TEL 048-524-1111							
発 行 年 月 日	西暦2006（平成18）年 3 月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯 (° ' ")	東緯 (° ' ")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがし うら い せき 東 浦 遺 跡	さいたまけんくまがやし おおぞ 埼玉県熊谷市小曾 ねあざひがしうら 根字 東 浦337-1他	11202	059-111	36°10'14"	139°23'35"	20050419 } 20050603	270	老人介護 ホームの 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
東 浦 遺 跡	集落跡	古墳時代	遺物包含層		土師器			
			住居跡	7 軒	須恵器			
			竪穴状遺構	1 基	石製品（紡錘車）			
			土坑	5 基	土製品（土錘）			
		中世以降	掘立柱建物跡	1 棟	土師器			
			土坑	5 基	陶器			
			溝跡	2 条	石製品（板碑）			

熊谷市東浦遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

東 浦 遺 跡

平成18年 3 月31日発行

発行／埼玉県熊谷市東浦遺跡調査会

印刷／朝 日 印 刷 工 業 株 式 会 社